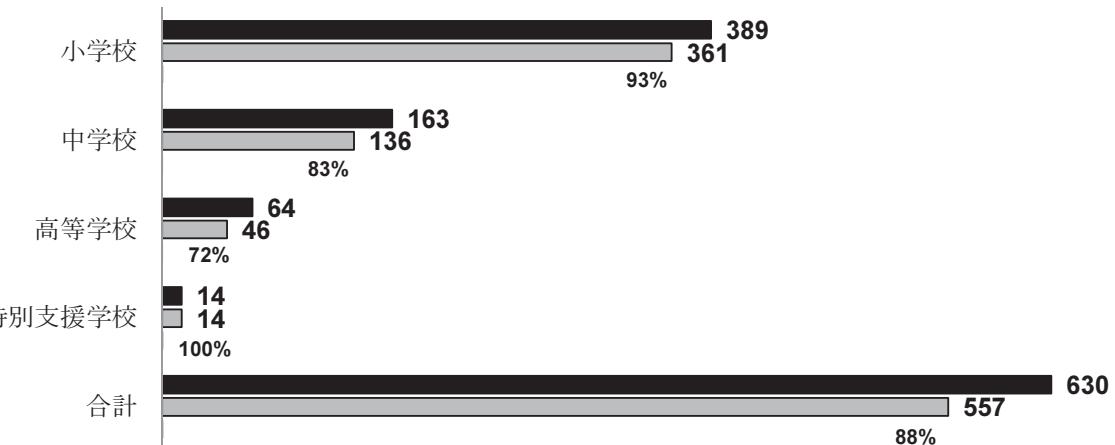


2 学校対象アンケート調査

アンケート回収率

■対象数 □回収校数

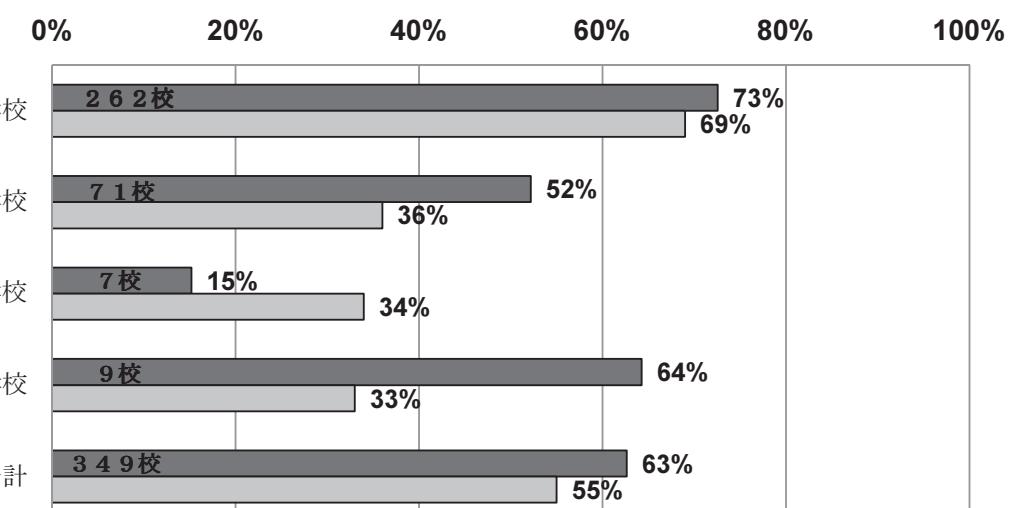


学校対象のアンケートは、県内の公立小・中学校、県立学校（高等学校・特別支援学校）に悉皆調査を実施した。（小学校 389 校、中学校 163 校、高等学校 64 校、特別支援学校 14 校 計 630 校）

回収率は、小学校が 93%（361 校）、中学校が 83%（136 校）、高等学校が 72%（46 校）、特別支援学校が 100%（14 校）で、トータルでは 88%（557 校）であった。

問 1 貴校は、図書館と連携した事業（読み聞かせ、学校図書館における学習支援、学校図書館担当教諭への研修等）を実施していますか。該当する記号に○をつけてください。

連携事業実施率

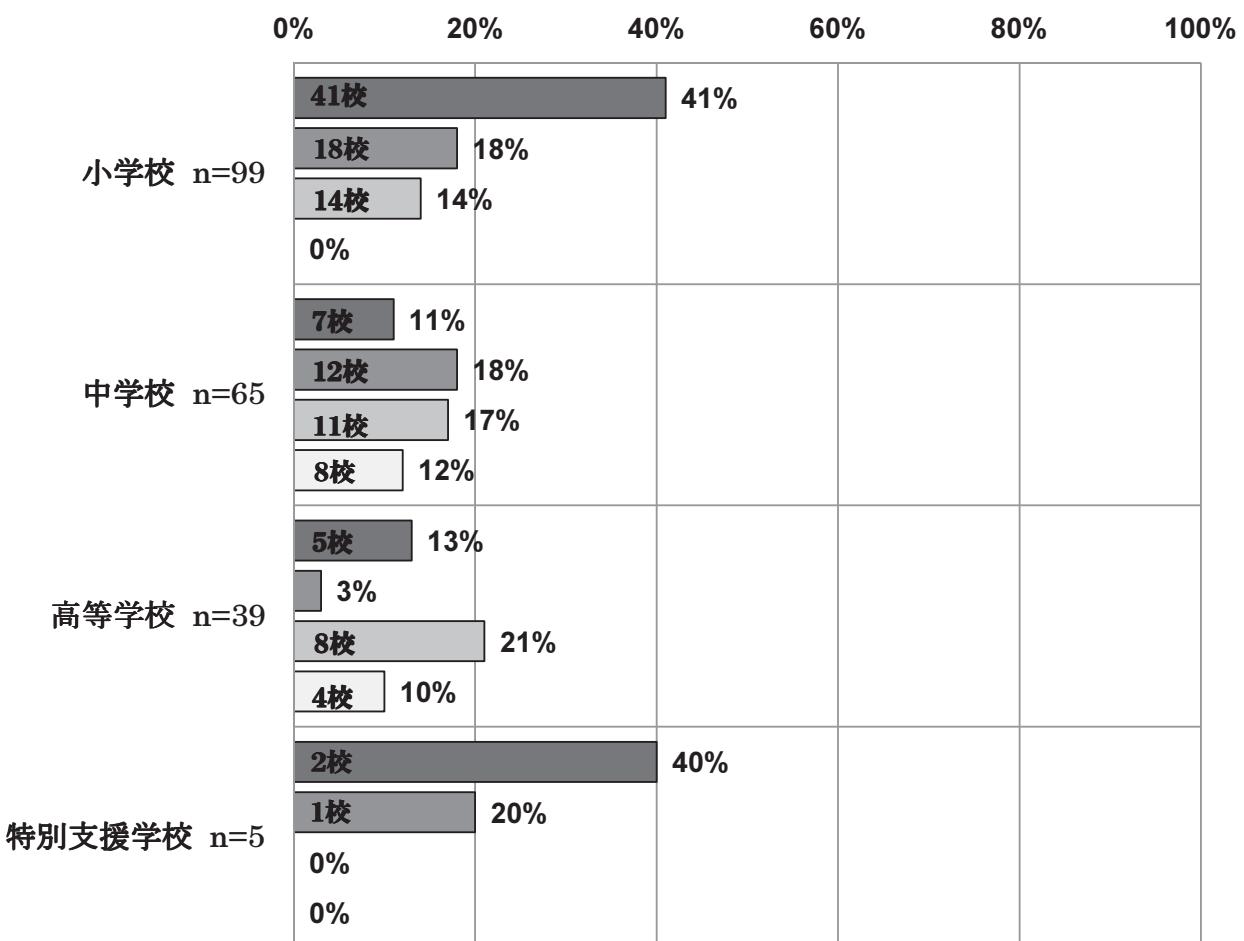


図書館との連携事業を実施しているのは、小学校 262 校（73%）、中学校 71 校（52%）、高等学校 7 校（15%）、特別支援学校 9 校（64%）である。全国平均が小学校 69%、中学校 36%、高等学校 34%、特別支援学校 33%（平成 20 年度「学校図書館の現状に関する調査」：文部科学省）であることをふまえると、高等学校以外は全国平均を上回り、特に特別支援学校や中学校に関しては全国平均を大幅に上回っていることが明らかになった。小学校での連携割合が最も多く、中学・高校になるほど連携事業の割合が減少するのは全国的な傾向と一致する。

問2 問1で「イ　いいえ」と回答された理由はどのようなものですか。

連携を行わない理由

■必要性が感じられない ■距離が遠い □時間的な余裕がない □機会がない



[小学校] n = 99

「必要性が感じられない」が 41 校 (41%) と最も多かった。その理由については、「ボランティアの人々が読み聞かせや学校図書館の飾り付けなどを行ってくれるから」が 31 校 (31%) となっている。自校の学校支援ボランティア（主として図書館で活動する）がいれば、特に図書館と連携する必要を感じないということであろう。この場合、図書館との連携を読み聞かせや図書館の充実といった点に狭く捉えられてしまう傾向がある。特に「ボランティアが読み聞かせをしてくれるから連携の必要性が感じられない」という回答からは、図書館との連携事業を「読み聞かせ」に特化して考える傾向があることもうかがえる。また、調べ学習に関しては、「校内の蔵書等でまかなえる」「巡回図書の利用で十分なため必要性を感じない」という回答も見られることから、図書館との連携の意味内容が十分に咀嚼されていないと考えられる。（例えば巡回図書の利用は、図書館との連携によるものである）

次に、「距離が遠い」が 18 校 (18%)、「時間的な余裕がない」が 14 校 (14%) でそれに続く。また、「図書館と連携できることを知らない」が 8 校 (8%) あり、図書館との連携に関する情報が不足している側面も見られる。一部地域によっては「公立図書館がない」あるいは「蔵書や資料数が少なく連携する意義がない」「受け入れを断られた」など、そもそも連携を進めるのが困難な状況も見受けられる。

〔中学校〕 n = 65

「距離が遠い」が 12 校 (18%) で最も多く、次に「時間的な余裕がない」が 11 校 (17%) となっている。「機会がない・計画がない・実績がない」が 8 校 (12%)、「必要性がない」が 7 校 (11%) でそれに続く。さらに「職員の数が足りない」「どのように連携すればいいのかわからない・手続きがわからない」が 4 校 (6%) など、基本的には小学校の結果と似たものになっている。

〔高等学校〕 n = 39

高等学校では、「時間的余裕がない」が最も多く 8 校 (21%)、「必要性がない」が 5 校 (13%)、続いて「連携の方法・手続き等が不明」「機会がない」が 4 校 (10%) となっている。「距離が遠い」「担当者がいない」「需要がない」「効果に疑いがある」は、それぞれ 1 校 (3%) である。小中学校との大きな違いは「距離」は大きな問題とされておらず、むしろ、「時間的な余裕」や「必要性」に大きな要因がある。

〔特別支援学校〕 n = 5

特別支援学校からの回答では、「必要性がない」が 2 校 (40%、うち 1 校はボランティアの活用で間に合っているというものの)、「実態にあった事業が見あたらない」「距離が遠い」「校内に連携担当者がいない」がそれぞれ 1 校 (20%) であった。

全校種を通じて見られる特徴は、「時間的な余裕がない」という回答が多いことである。これは、教員が多忙であり、現状では図書館との連携を行うための企画・準備・連絡調整等に十分な時間がとれないということと、教育課程の授業時数上、図書資料等を用いてじっくりと調べる学習の時間が確保できないという 2 つの背景があるものと理解できる。特に、小学校から中学・高等学校となるにつれ、受験や資格試験等への対応から指導内容が増えることもあり、後者の理由が大きくなると思われる。

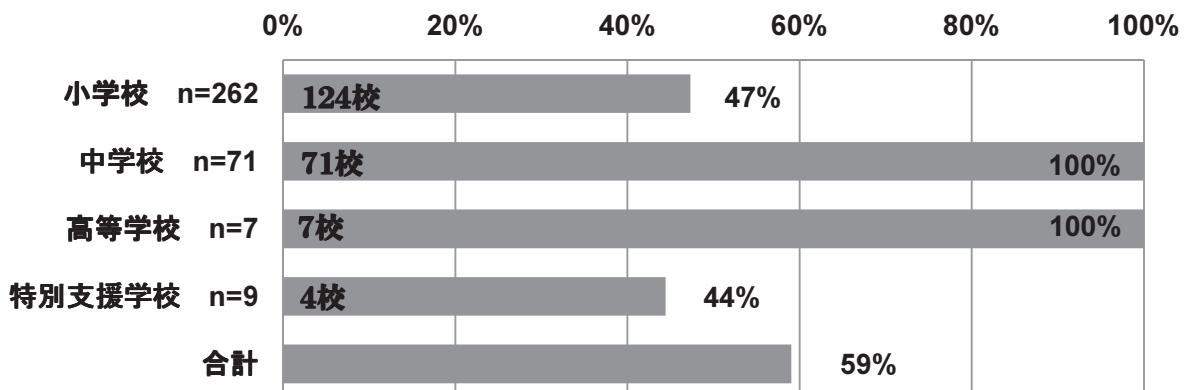
また、「連携事業が行われていることを知らない」「連携するためにどのような手続きをすればよいのかわからない」といった回答も数多く見られた。一部の回答者から、「今回のアンケート用紙を見て初めていろいろな連携の形があることを知った」という意見も寄せられた。学校支援ボランティアによる読み聞かせはかなりの割合で普及しているが、図書館との連携については、学校現場でも依然として理解・周知が進んでいない状況がうかがえる。

なお、連携を実施していないと回答している学校の回答票を丁寧に見ていくと、実際には具体的な連携事例と解釈できる報告や回答があり、「実施していない」という回答は必ずしも現状を正しく表していないが、本調査では、「連携していない」という回答数を変更することなく、サンプルを取り扱っているので、項目によっては数字の整合性がとれていない。これらについては、例示はしているものの「連携」に対するイメージが回答者によって異なったためとみられる。

問3 昨年（平成21年）度、あなたの学校では、どのような内容で図書館と連携しましたか。それぞれ該当する記号に○をつけてください。（複数回答可）

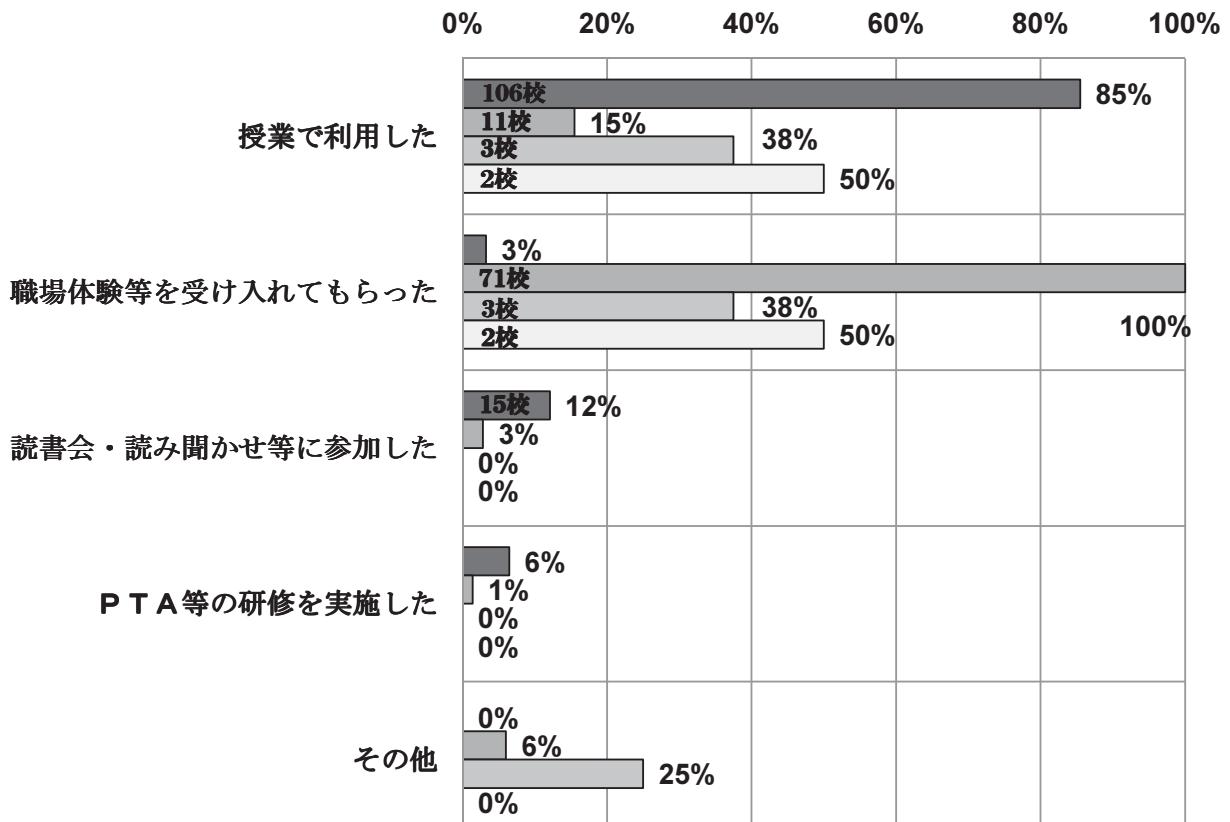
① 図書館に出向いての活動

連携事業で図書館に出向く学校



図書館に出向いての活動

■小学校 n=124 ■中学校 n=71 ■高等学校 n=7 □特別支援学校 n=4



[小学校] n = 124

連携事業を実施していると回答のあった 262 校のうち、学校が図書館に出向いて利用しているのは 124 校 (47%) であった。図書館が学校に出向くという利用が 241 校 (92%) であったのと比較すると、およそ半数にとどまっている。これは時間的・距離的な制約（交通手段を含む）によるものと思われる。

事業内容では、「授業で利用した」が最も多く、106 校 (85%) で、「読書会・読み聞かせ会などの企画に参加した」が 15 校 (12%)、「PTA などの研修を実施した」が 8 校 (6%)、「マイチャレンジ（職場体験・社会体験）を受け入れてもらった」が 4 校 (3%) となっている。その他、「図書館利用推進事業への参加」（佐野市）「図書館ボランティアの研修」（宇都宮市）「学級文庫の本を借りに行った」（宇都宮市・那須塩原市）「リサイクル図書の引き取り」（宇都宮市）「一日子ども図書館係員」（那須町）「一日司書体験」（真岡市）「本の貸出・返却」（壬生町）「読み聞かせボランティアの本の貸出・返却」（栃木市）「ブックトーク研修会への参加」（栃木市）などがある。また、「その他」の欄に「社会科見学」「生活科見学」などと記入してきたケースについては、「授業で利用した」に含めた。

[中学校] n = 71

連携事業を実施している学校全てが図書館に出向いての利用を行っている。その内容は「マイチャレンジ（職場体験・社会体験）を受け入れてもらった」であり、71 校 (100%) となっている。以下「授業で利用した」が 11 校 (15%)、「読書会・読み聞かせ会などの企画に参加した」が 2 校 (3%)、「PTA などの研修を実施した」が 1 校 (1%) と続く。その他、「図書館協議会への参加」（野木町）「団体貸出」（宇都宮市）などがあった。

[高等学校] n = 8

連携事業を実施していると回答のあったのは 7 校であったが、8 校からの回答を得た。「授業で利用した」「マイチャレンジ（職場体験・社会体験）を受け入れてもらった」がそれぞれ 3 校 (38%) であった。その他「授業の資料探し」（栗野高等学校）「図書館見学会の実施」（日光明峰高等学校）という回答も見られた。

[特別支援学校] n = 4

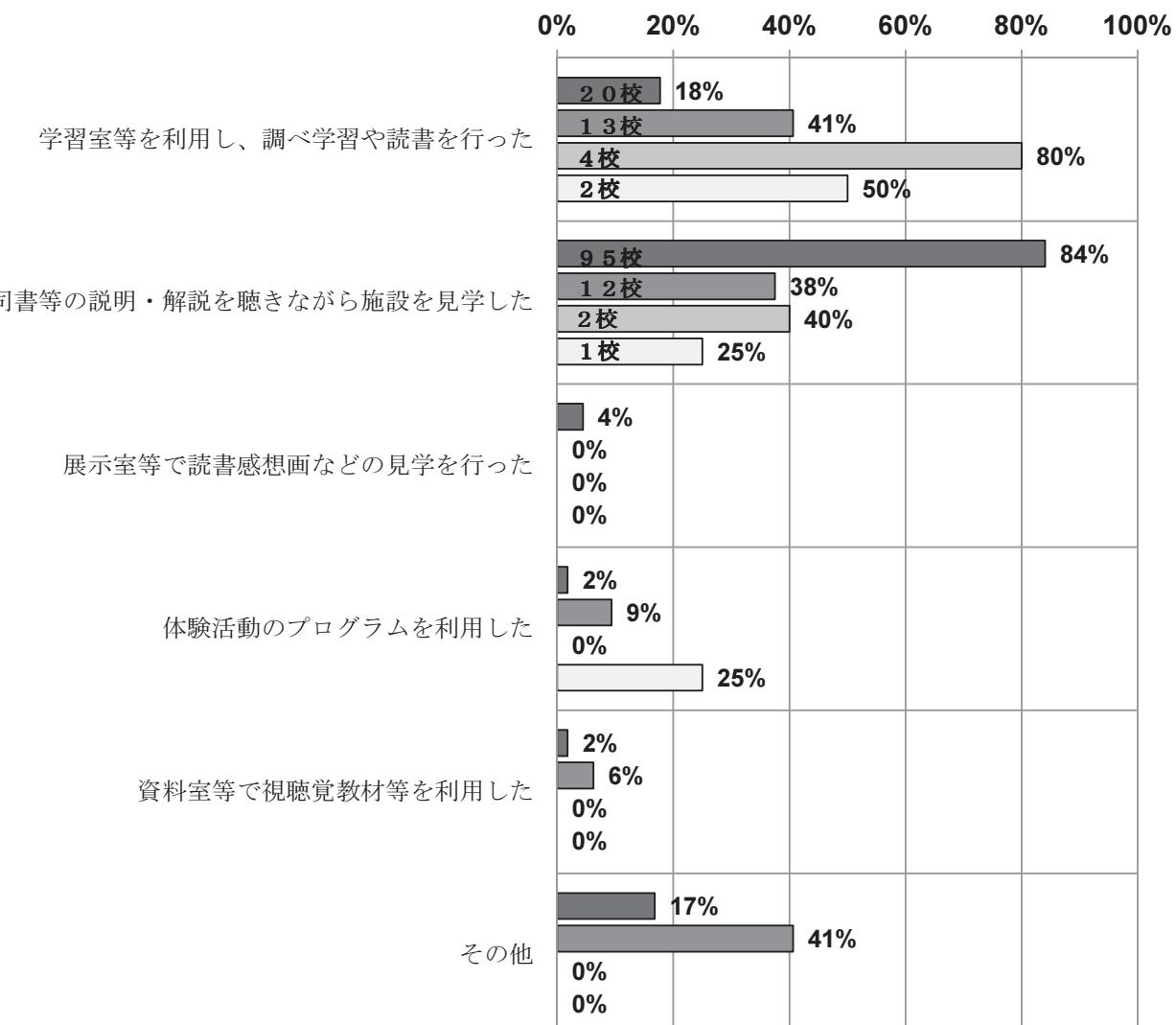
連携事業を実施していると回答のあった 9 校のうち、図書館に出向いて利用している学校は 4 校 (44%) であった。「授業で利用した」が 2 校 (40%)、「マイチャレンジ（職場体験・社会体験）を受け入れてもらった」が 2 校 (40%) であった。

小学校では教科学習での利用が多いのに対し、中・高・特別支援では職場体験・インターンシップの受入が多いのが特徴である。小学校は「その他」のバリエーションが他校種に比べて多くなっているが、これは図書館側が小学生を対象とした連携事業を数多く実施していることをうかがわせる。

② 図書館での利用形態

図書館での利用形態

■ 小学校 n=113 ■ 中学校 n=32 □ 高等学校 n=5 □ 特別支援学校 n=4



[小学校] n = 113

図書館に出向いて利用している小学校 124 校のうち、113 校 (91%) から回答を得た。

「司書等の説明・解説を聴きながら施設全体を見学した」が 95 校 (84%)、「学習室などを利用し、調べ学習や読書を行った」が 20 校 (18%) であった。「展示室などで読書感想画などの見学を行った」が 5 校 (4%)、「体験活動のプログラムを利用した」「資料室等で視聴覚教材等を利用した」はそれぞれ 2 校 (2%) と非常に少ない。「その他」としては、「読み聞かせをしてもらった」(那珂川町)「各自のカードで貸出体験をした」(栃木市・壬生町・大田原市・那須塩原市・佐野市)「研修会場として利用した」(鹿沼市)「司書業務の体験」(那須町)「団体貸出をしてもらった」(宇都宮市・那須塩原市)などが挙げられている。

以上の結果から、小学校が実施する図書館の訪問利用の大半が「生活科見学・社会科見学」であることが読み取れる。見学では、図書館の設備や機能、地域の中で果たす役割などを学ぶほか、実際に貸出カードを利用して本を借りる体験を行う学校も見られた。

[中学校] n = 32

図書館に出向いて利用している 71 校のうち、32 校（45%）から回答を得た。中では、「学習室などを利用し、調べ学習や読書を行った」が 13 校（41%）と最も多く、「司書等の説明・解説を聴きながら施設全体を見学した」が 12 校（38%）であった。「体験活動のプログラムを利用した」は 3 校（9%）、「資料室等で視聴覚教材等を利用した」は 2 校（6%）にとどまった。「その他」としては、職場体験等についての記述がやや多く見られたほか、「司書教諭と図書ボランティアの研修」「資料の選書」などが見られた。

小学校と比べて、「学習室を利用した調べ学習や読書など」の利用割合が多くなっているのが特徴である。

[高等学校] n = 5

図書館に出向いて利用している 8 校のうち、5 校（63%）から回答があった。高等学校では「学習室などを利用し、調べ学習や読書を行った」が 4 校（80%）、「司書等の説明・解説を聴きながら施設全体を見学した」が 2 校（40%）で、他の利用形態は無かった。インターンシップでの利用については「司書等の説明・解説を聴きながら施設全体を見学した」に含まれるものと想定される。小・中学校と比較すると「学習室を利用した調べ学習や読書など」の利用割合が多くなっているが、サンプル数が少ないので、高等学校の全体的な傾向というよりは、むしろ特別な必要性が生じた際に利用したり、高校生が自主的に図書館で学習したりする現実を反映したものと思われる。

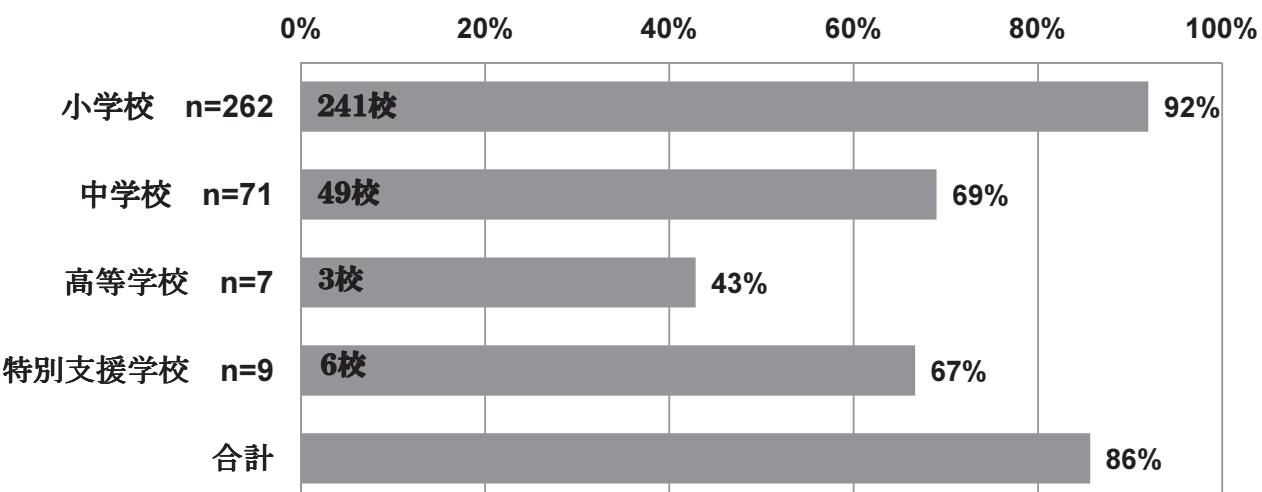
[特別支援学校] n = 4

図書館に出向いて利用している 4 校すべてから回答を得た。特別支援学校では、「学習室などを利用し、調べ学習を行ったり読書を行ったりした」が 2 校（50%）、「司書等の説明・解説を聴きながら施設全体を見学した」「体験活動のプログラムを利用した」がそれぞれ 1 校（25%）であった。その他として、「カウンター業務体験」と職場体験等に関わる記述が見られた。利用形態としては、職場体験または調べ学習という中学校・高等学校と似た傾向が見て取れる。

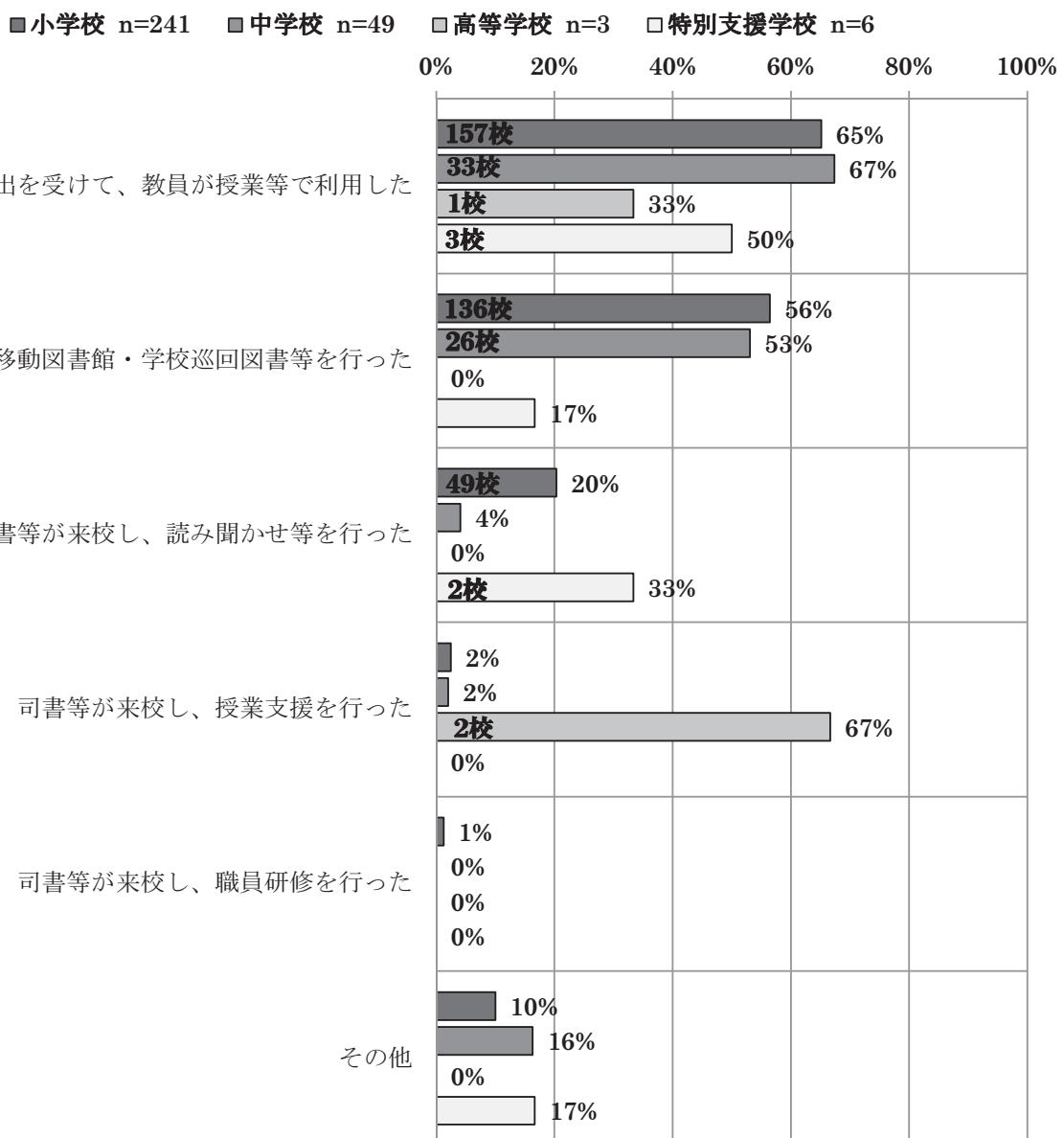
図書館を訪問する利用形態を見ると、全体的には「見学」での利用が主の小学校と、「職場体験」・「調べ学習」を主とする中・高・特別支援学校という 2 つのグループに大別できる。

③ 学校内での連携

図書館が学校に出向く連携事業の実施率



図書館の支援を受けて校内で実施する連携事業



〔小学校〕 n = 241

連携事業を実施していると回答のあった 262 校のうち、学校内での連携を実施している学校は 241 校 (92%) であった。事業内容としては「図書館資料の貸出を受けて、教員が授業等で利用した」が最も多く 157 校 (65%)、次いで「移動図書館・学校巡回図書等を行った」が 136 校 (56%) となっている。「司書等が来校し、読み聞かせ等を行った」は 49 校 (20%)、「司書等が来校し、授業の支援を行った」は 6 校 (2%)、「司書等が来校し、職員研修を行った」は 3 校 (1%) であった。「その他」として「読み聞かせ・調べ学習のための団体貸出」(宇都宮市・足利市・大田原市・野木町・小山市・下野市・那須烏山市・那珂川町)、「司書が来校し、本の修理の仕方を教えてもらった」(足利市)「古い本の廃棄・新刊本の受入れを支援してもらった」(大田原市)「司書が来校し、ボランティアへの研修を行った」(那須町・那須塩原市)「図書館ボランティアが来校し、読み聞かせを行った」(那須塩原市・さくら市・那珂川町)「読み聞かせボランティアが図書館から貸出を受けている」(鹿沼市)「学校図書館業務補助員の派遣」(小山市)「国語の教科書に出てくる本を各学年に定期的に貸し出してくれる。」(さくら市)などが挙げられ、多様な連携が進んでいることが明らかである。特に、団体貸出を行っている図書館が多いことが注目される。

〔中学校〕 n = 49

連携事業を実施していると回答のあった 71 校のうち、学校内で実施している学校は 49 校（69%）であった。中学校では、「図書館資料の貸出を受けて、教員が授業等で利用した」が最も多く 33 校（67%）、「移動図書館・学校巡回図書等を行った」が 26 校（53%）で、「司書等が来校し、読み聞かせ等を行った」は 2 校（4%）、「司書等が来校し、授業の支援を行った」は 1 校（2%）と、ほとんど実施されていない。「その他」としては、「図書館で研修した団体に読み聞かせをしてもらった」（小山市）「司書が来校し、ブックトークを行った」（栃木市）「学校図書館司書が生徒のリクエストをとり、図書館から貸出を受けて図書室で閲覧させた」（矢板市）「図書館ボランティアに協力を依頼し、図書の受入れを行った」（大田原市）「図書館ボランティアの方が図書館から本を借り、ブックトークを行った後、2~3 か月教室で自由閲覧させた」（那須塩原市）「団体貸出を受け、廊下などのスペースに各教科関連の書籍をおいた」（那須塩原市）などが挙げられた。

〔高等学校〕 n = 3

高等学校では、連携事業を実施している 7 校のうち、校内での実施は 3 校（43%）となっている。内訳は「司書等が来校し、授業の支援を行った」が 2 校（67%）、「図書館資料の貸出を受けて、教員が授業等で利用した」が 1 校（33%）である。

〔特別支援学校〕 n = 6

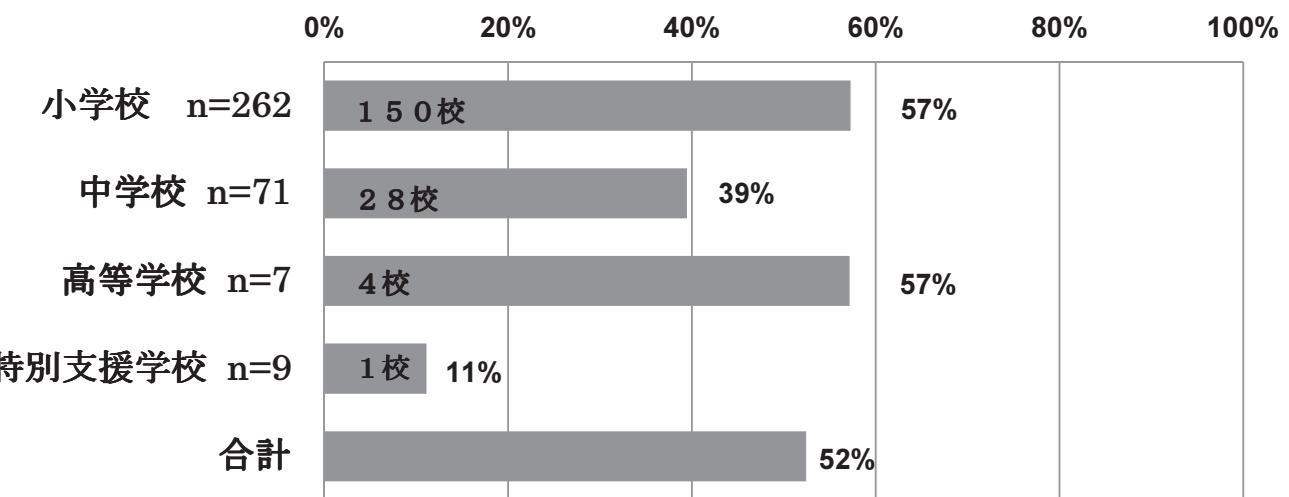
連携事業を実施している 9 校のうち、学校内で実施しているのは 6 校（67%）であった。特別支援学校では、「図書館資料の貸出を受けて、教員が授業等で利用した」が 3 校（33%）、「司書等が来校し、読み聞かせ等を行った」が 2 校（22%）、「移動図書館・学校巡回図書等を行った」が 1 校（11%）であった。「その他」として「団体貸出を受け、生徒が利用した」が 1 校（11%）である。

学校内の連携を概観すると、小・中学校では、図書の利用が圧倒的に多く、図書館の本来の機能が生かされた連携内容となっている。少数ではあるが、図書館との豊かな連携を行っているケースも見られる。

高等学校では司書が学校に来て行う連携はほとんど見られないのが特徴である。

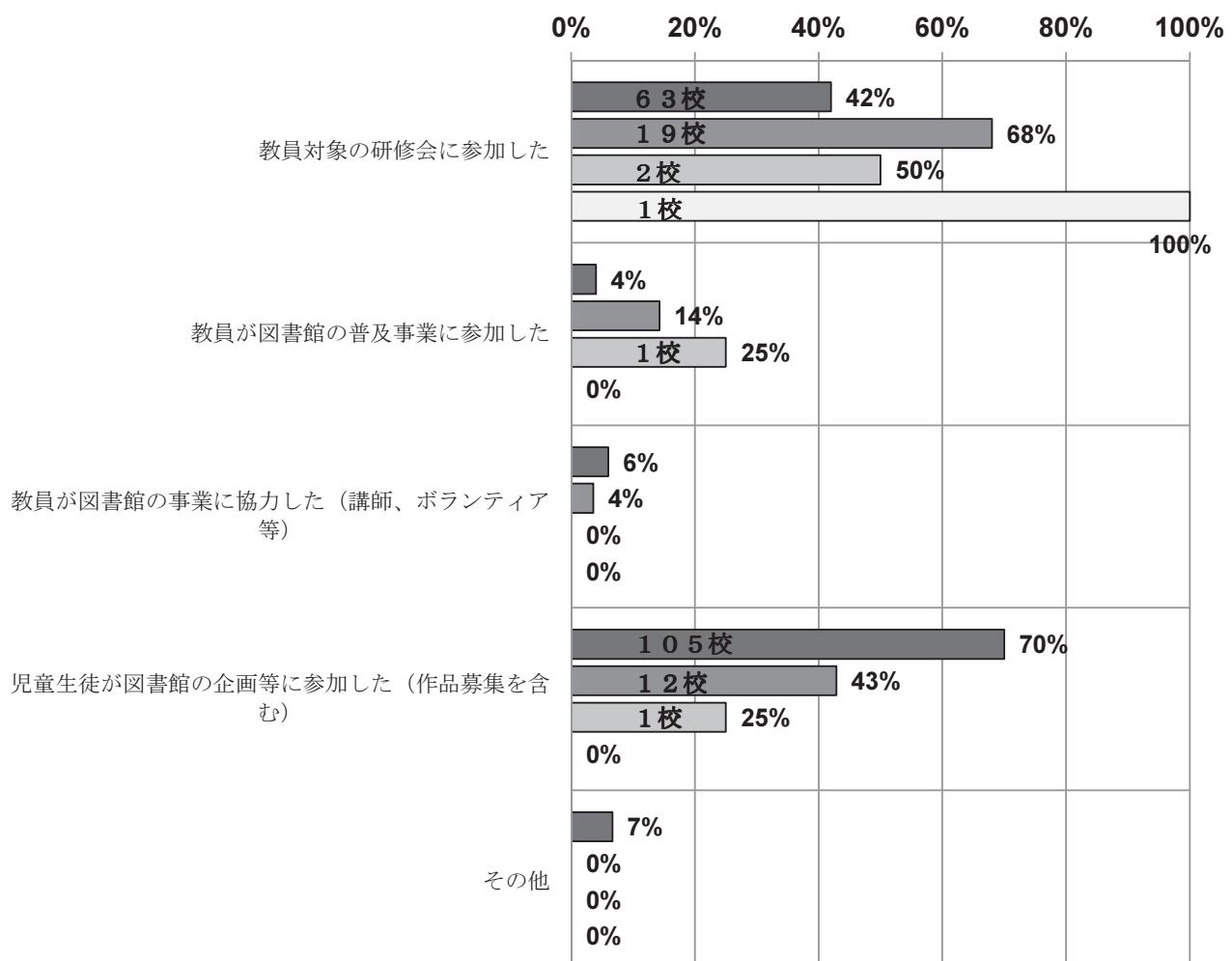
④ その他、図書館との関係

図書館・学校内での児童生徒利用以外の関係



その他の関係内容

■ 小学校 n=150 ■ 中学校 n=28 □ 高等学校 n=4 □ 特別支援学校 n=1



図書館・学校内での児童生徒利用以外の関係をみると、教員が係わるものとしては、図書館主催の研修会の参加に、児童生徒の場合は図書館の主催事業への参加にはほぼ集約されている。

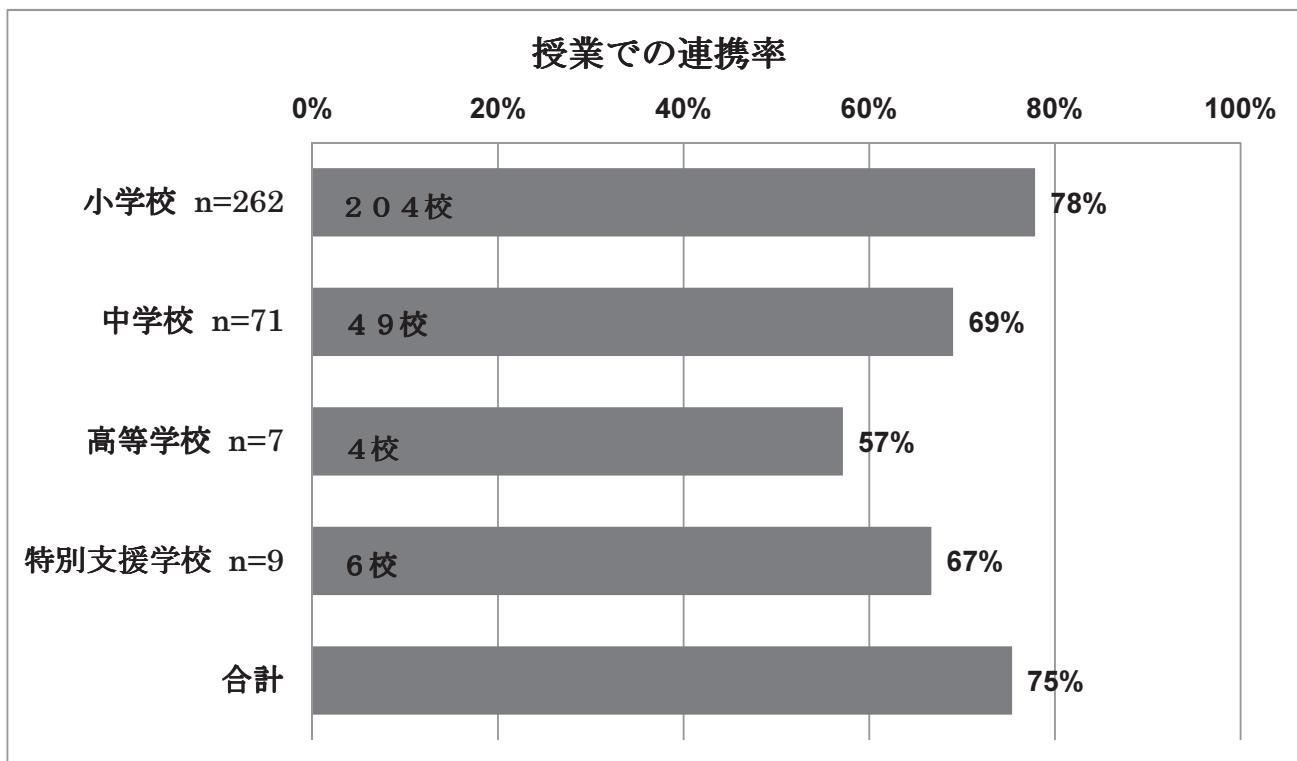
「その他」として、「市内の学校が市立図書館と学校図書館システムでつながっている」(小山市)「図書購入の際に選書のアドバイスを求めた」(鹿沼市)「学校支援ボランティアが研修会に参加」(大田原市・宇都宮市)「学校支援ボランティアが貸出を受けている」(大田原市)「リサイクル本を提供してもらっている」(宇都宮市)、「各学校の図書館ボランティアと担当教師の協議会」(高根沢町)「視聴覚機材の貸出」(宇都宮市)などが見られた。

注目されるのは、小山市の市立図書館と学校図書館のオンライン化である。全国の先進地のみならず、県内でもこのシステムがすでに稼働している市町がいくつかあるが、市立図書館と学校図書館が連携を図る上で、さまざまな手続き等を省力化・迅速化することは、より円滑な交流を進める上で注目される。

これまでの結果と同様に、小学校が最も図書館との関係が深く、中学校・特別支援学校・高等学校の順に図書館との関係が希薄になる状況が見て取れる。

他の図書館利用の項目に見ていくと、バリエーションに富んだ連携事業が展開されているが、それらはまだほんの一部に過ぎず、一般的な連携事業としての拡がりが見られない。

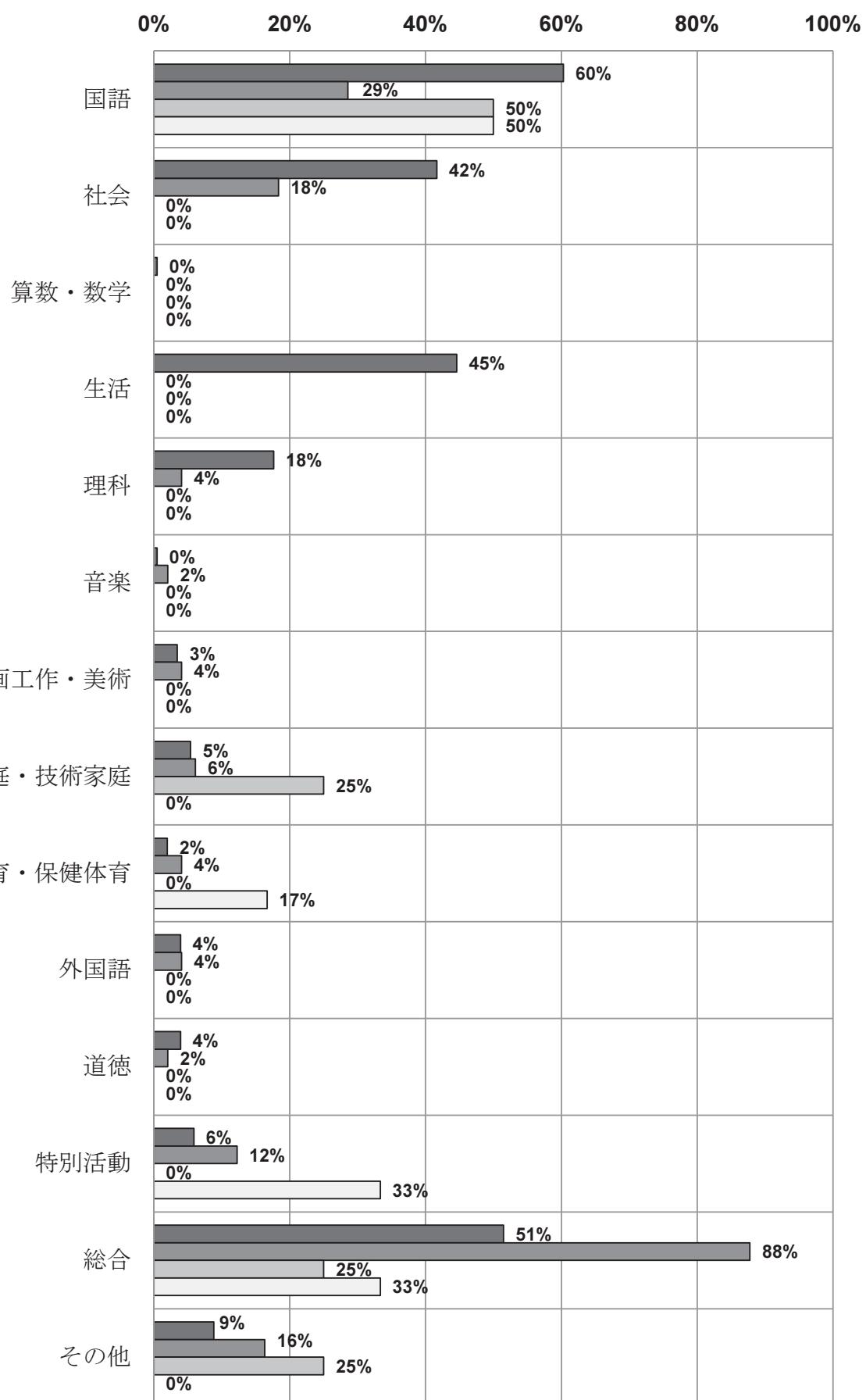
**問4 授業で連携したケースでは、どのような教科・領域で図書館と連携しましたか。
該当する記号すべてに○をつけてください。**



図書館との連携の内容は、学校としては「読書活動」とともに「授業」における展開が中心となる。これは全ての学校種でほぼ同様の傾向を示しているが、小学校でより顕著である。

教科別連携率

■ 小学校 n=204 ■ 中学校 n=49 □ 高等学校 n=4 □ 特別支援学校 n=6



教科別学年別連携率

[小学校]

	1年		2年		3年		4年		5年		6年	
	校数	割合										
国語	71	35%	62	30%	63	31%	53	26%	50	25%	60	29%
社会					55	27%	29	14%	30	15%	34	17%
算数	1	0%	1	0%	1	0%	1	0%	1	0%	1	0%
生活	38	19%	83	41%								
理科					12	6%	21	10%	17	8%	14	7%
音楽	1	0%	1	0%	2	1%	2	1%	1	0%	1	0%
図画工作	1	0%	4	2%	1	0%	4	2%	2	1%	1	0%
家庭									6	1%	9	0%
体育	1	0%	2	1%	2	1%	4	2%	2	1%	1	0%
外国語	2	1%	2	1%	3	1%	2	1%	7	3%	4	2%
道徳	3	1%	3	1%	3	1%	3	1%	3	1%	4	2%
特別活動	4	2%	3	1%	4	2%	5	2%	6	3%	10	5%
総合					56	27%	67	33%	65	32%	60	29%
その他	13	6%	13	6%	12	6%	12	6%	13	6%	12	6%

[小学校] n = 204

連携事業を実施している 262 校のうち、授業で図書館と連携している学校は 204 校 (78%) である。

利用教科別に見ると、「国語」が最も多く 123 校 (60%)、次いで「総合的な学習の時間」が 105 校 (51%) で、半数を超える学校が図書館と連携した授業を展開している。また、「生活」が 91 校 (45%)、「社会」が 85 校 (42%) と、この 2 教科においても見学を中心に多くの学校で図書館と連携した授業が行われている様子がうかがわれる。以下、「理科」36 校 (18%)、「特別活動」12 校 (6%)、「家庭」11 校 (5%)、「道徳」「外国語」8 校 (4%)、「図工」7 校 (3%)、「体育」4 校 (2%)、「算数」「音楽」が 1 校 (0.5%) と続いた。一方、「その他」として、いずれの教科や領域で時数をカウントしたのかは不明であるが、人権週間や読書月間、音読集会さらには食育などでの連携事例が挙げられている。ただし、これらについては、業間や昼休み等にイベント的に実施された可能性も考えられる。

さらに学年も含めてみていくと、「国語」と「総合」では、実施学年のすべてで連携率が 25% を上回り、特に 4 年生と 5 年生では、「総合」が「国語」よりも多く、6 年生でも同数となっていることが見て取れる。先に述べた結果では連携事業の実施校数で「国語」が最上位の 123 校、「総合」がそれに次ぐ 105 校となっているが、「国語」が 1~6 年生、「総合」は 3~6 年生での実施ということを考慮すれば、1 学年あたりでは「総合」での連携が「国語」での連携を上回るとも考えられる。

また、学年教科別に見ると、2 年生活科の 83 校 (41%) が最も多くなっているが、1 年生の生活科で連携している 38 校 (19%) の 2 倍以上となっているのは、図書館の見学が主に 2 年生で実施されているためと考えられる。社会科でも 3 年生の利用が他の学年に比べて 1.6~1.9 倍と多くなっているが、同様に見学での利用が数値を押し上げているものと推定される。他教科では学年間で特に大きな差異は認められない。

教科別学年別連携率

〔中学校〕

	1年		2年		3年	
	校数	割合	校数	割合	校数	割合
国語	11	22%	7	14%	5	10%
社会	8	16%	4	8%	5	10%
数学	0	0%	0	0%	0	0%
理科	1	2%	2	4%	1	2%
音楽	0	0%	1	2%	0	0%
美術	0	0%	0	0%	2	4%
技術家庭	1	2%	2	4%	2	4%
保健体育	1	2%	1	2%	0	0%
外国語	2	4%	2	4%	2	4%
道徳	0	0%	1	2%	0	0%
特別活動	2	4%	5	10%	3	6%
総合	18	37%	34	69%	21	43%
その他	6	12%	8	16%	6	12%

〔中学校〕 n=49

連携事業を実施していると回答のあった 71 校のうち、授業で連携している学校は 49 校 (69%) であった。「総合的な学習の時間」での連携が 43 校 (88%) と圧倒的に多く、以下「国語」14 校 (29%)、「社会」9 校 (18%)、「特別活動」6 校 (12%)、「技術・家庭」3 校 (6%)、「理科」「保健体育」「外国語」2 校 (4%)、「音楽」「道徳」1 校 (2%) と続き、「数学」での連携はなかった。「その他」としては、「部活動」「文化祭」「全校ブックトーク」「委員会」「お弁当の日」「給食」などが挙げられた。

学年別に見ると、「総合的な学習の時間」では、2 年生での連携が突出して多くなっているのが特徴である。2 年生の学習で扱うテーマに図書館との連携を必要とするような内容が集中した可能性も考えられるが、キャリア教育の一端として 2 年時に実施されるマイチャレンジ（職場体験）との関連が深いことが想定される。

〔高等学校〕 n=4

高等学校で、連携事業実施を実施している 7 校のうち、授業で連携しているのは 4 校 (57%) である。内訳は「国語」が 2 校 (50%)、「総合的な学習」「家庭科」が各 1 校 (25%) であり、「その他」として、「工業」という回答が 1 校 (25%) から挙げられている。連携事業を実施する高等学校そのものも少ないが、授業での連携も総じて低調といえる。

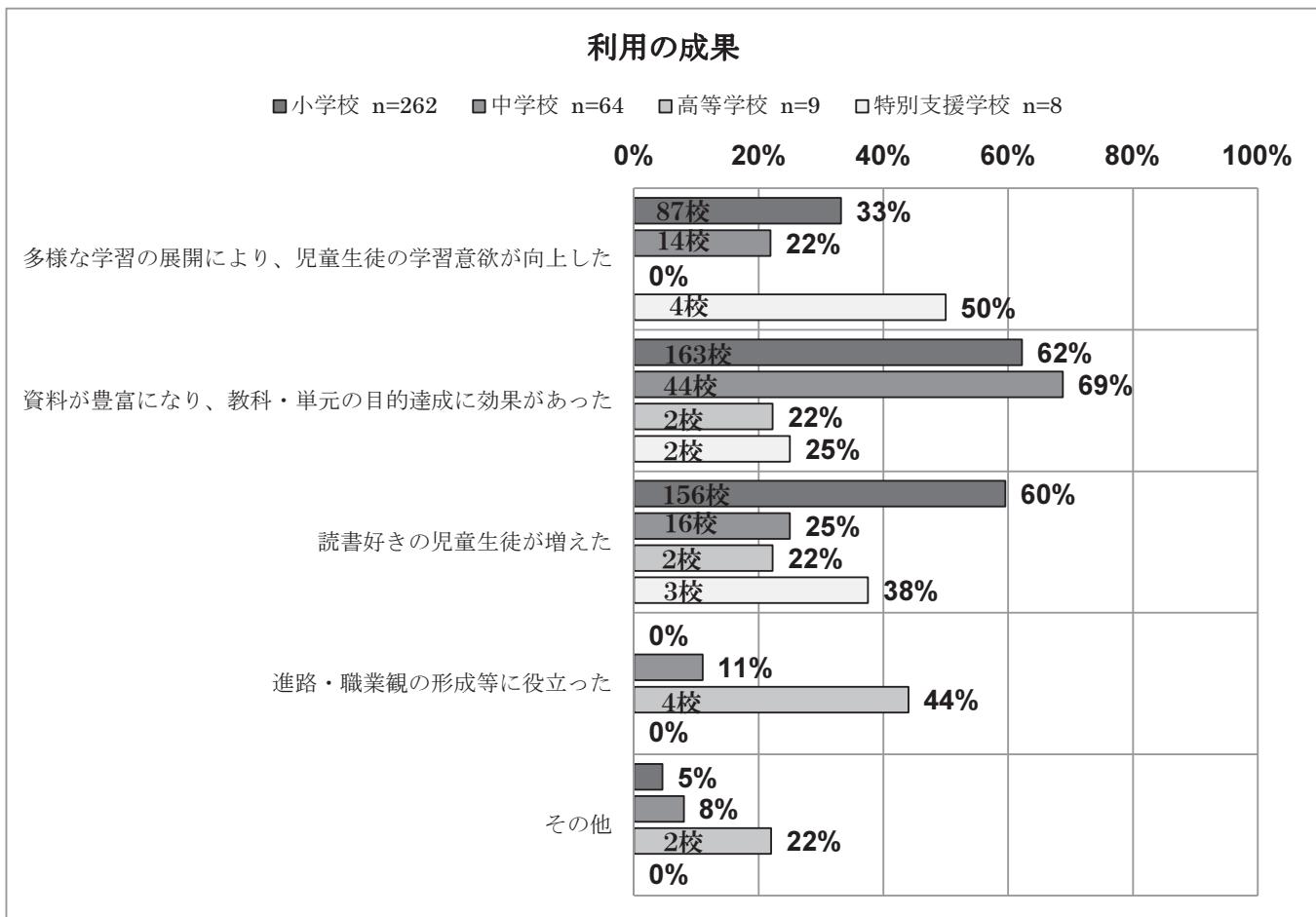
〔特別支援学校〕 n=6

連携事業実施を実施している 9 校のうち、授業で連携しているのは 6 校 (67%) である。内訳は「国語」が 3 校 (50%)、「総合的な学習の時間」「特別活動」の利用がそれぞれ 2 校 (33%)、「体育」が 1 校 (17%) であった。「その他」としては、「おはなし広場」「生活単元学習」「自立活動」「職業」などが挙げられている。

全体としては、「総合的な学習の時間」の利用が顕著であるが、これは幅広い学習内容に対応する資料が学校図書館だけでは賄えない現状を示すものであろう。

また、ここには示さないが、この調査の結果、宇都宮市では教科の学習に図書館資料を利用する学校の割合が他市町に比べて高いことが明らかとなった。その背景には、全校に配置されている学校司書が学校と図書館を「むすぶ」「つなげる」役割を果たしていること、また、宇都宮市がそうした要請に応えるための体制づくりや配達システムの整備を行っていることも関連していると考えられる。

問5 図書館を利用することにより、教育活動の成果があったと思いますか。該当する記号に○をつけてください。(複数回答可)



〔小学校〕 n = 262

図書館と連携事業を行っている全ての学校から回答があった。

最も多いかったのは、「資料が豊富になり、教科・単元の目的達成に効果があった」で 163 校 (62%)、次に「読書好きの児童生徒が増えた」の 156 校 (60%)、「多様な学習の展開により、児童生徒の学習意欲が向上した」が 87 校 (33%) でそれに続いた。他の校種と比較すると、「読書好きの児童生徒が増えた」という回答が多いのが特徴である。

「その他」として、「学校にはない本を読むことで、本への関心が高まった」「読書への興味が高まった」「図書館を身近に感じる児童が増え、図書館へ行って本を借りて読みたいという意欲が高まった」「図書館に興味・関心を持つようになった」など、児童の読書への興味・関心・意欲づけに効果が上がったという回答や、それに伴って「図書館に足を運ぶ児童が増えた」「休みを利用して家族と本を借りに行ききっかけとなった」など、実際に児童の図書館利用や読書量の増加につながったという回答も見られた。また、「本が整備され、新刊本を早く子ども達に貸出しできた」「教員が研修で学んだ成果を学校図書館で実践した」「図書購入の際の選書の参考になる」などがみられた。

〔中学校〕 n = 64

連携事業を実施している 71 校のうち 64 校 (90%) から回答があった。その中では「資料が豊富になり、教科・単元の目的達成に効果があった」が 44 校 (69%) と最も多く、「読書好きの児童生徒が増えた」 16 校 (25%)、「多様な学習の展開により、児童生徒の学習意欲が向上した」 14 校 (22%)、「進路・職業観の形成等に役立った」 7 校 (11%) の順となった。一番多かった「資料が豊富になり、教科・単元の目的達成に効果があった」は、

回答率も小学校とほぼ同数であった。続く「読書好きの児童生徒が増えた」「多様な学習の展開により、児童生徒の学習意欲が向上した」についても、割合は下がっているものの、小学校と同じ順になっている。

その他としては「職場体験を通して生徒の心の成長が図れた」「図書館司書の仕事に対する理解が深まった」「働くことの難しさや、人との接し方について学べたように思う」「生徒の視野が広がった」「マイチャレンジを体験させてもらえたことにより、司書になりたいという希望が強くなった」「職場体験を通して、多くの図書館業務や人とのふれあいを体験し、職業観が深まった」「マイチャレンジにおいて、個に応じた進路学習が展開できた」などが見られた。また、「読書に対する意欲が高まった」「図書館へ足を運ぶ生徒が増えた」など生徒の変容や「ブックトークで紹介する本の選択の幅が広がった」のように教員側にもたらされるメリットなど、小学校と概ね一致する内容の回答が得られた。

〔高等学校〕 n=9

高等学校では、9校全てから回答があった。「進路・職業観の形成等に役立った」が4校(44%)で最も多く、「資料が豊富になり、教科・単元の目的達成に効果があった」「読書好きの児童生徒が増えた」がそれぞれ2校(22%)で、「進路・職業観の形成等に役立った」が最も多くなっているのは、図書館との連携事業の中で「インターンシップ」が大きな割合を占めていることに対応した結果と考えられる。その他としては、「職場体験によって、図書館の仕組や“働く”ということを効果的に学ばせることができた」「司書などをを目指す生徒の勉強になった」「図書館の業務について理解できた」「貴重な就業体験をさせていただいた」などの回答が見られた。

〔特別支援学校〕 n=8

連携事業を実施している9校のうち、8校(89%)から回答があった。「多様な学習の展開により、児童生徒の学習意欲が向上した」が4校(50%)、「読書好きの児童生徒が増えた」が3校(38%)、「資料が豊富になり、教科・単元の目的達成に効果があった」が2校(25%)であった。「その他」の回答はなかった。

図書館を利用する教育的効果について、特別支援学校を除いて小・中・高がほぼ同じ傾向を示した。小・中・高では教科・単元の指導目標達成、ひいては学力の定着・向上により効果的であり、特別支援学校では、児童生徒の学習意欲の向上により効果を発揮すると捉えることが出来る。

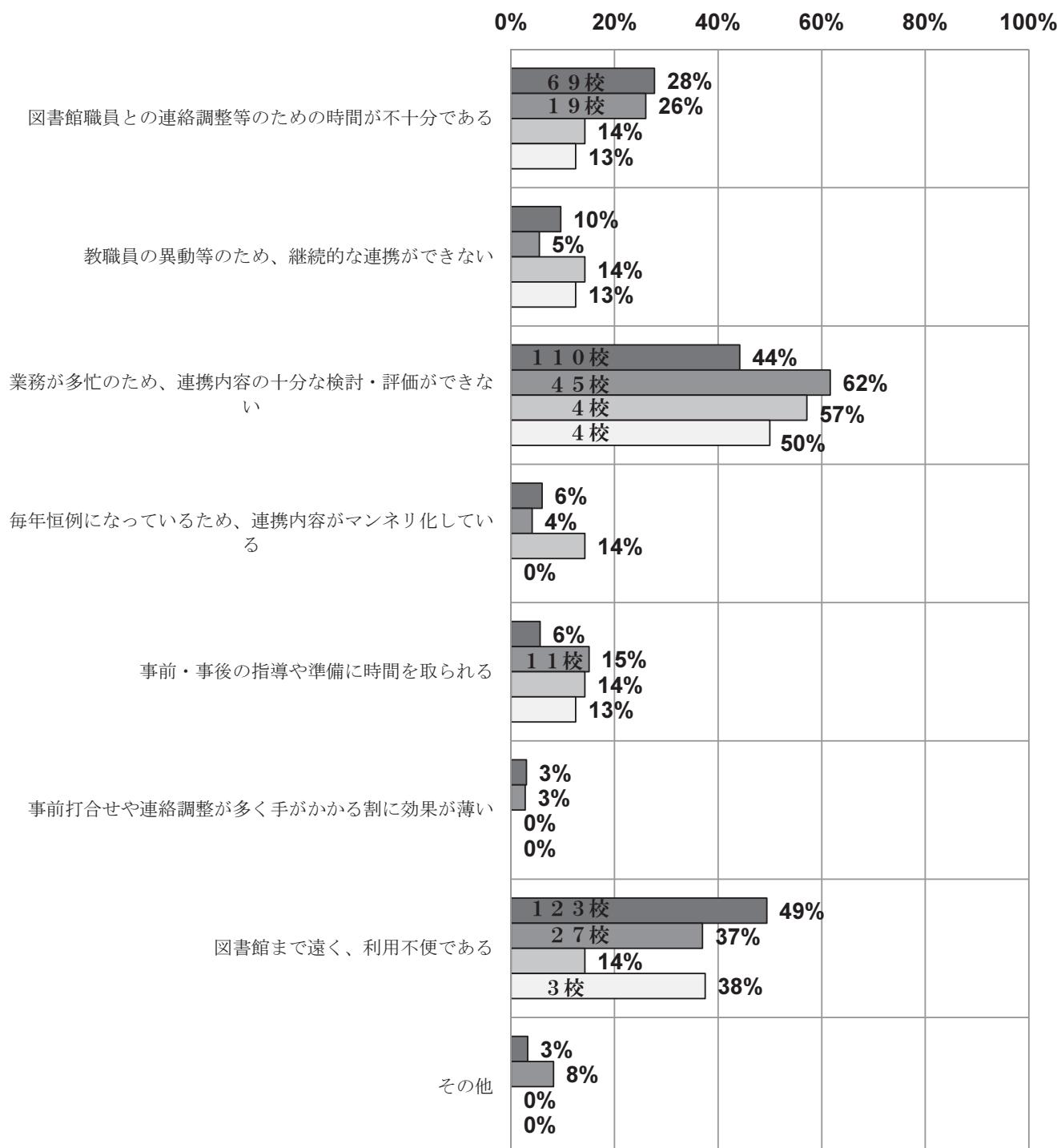
これらの結果については、後述する連携の必要性に関する設問と深く関係し、それぞれの校種で最も効果が挙がったとする項目と最も必要性を感じている項目が一致する点が興味深い。あるいは、最も必要性を感じている項目において最も効果があったと捉えていると言い換えることもできる。いずれにせよ、結果として図書館との連携が学校側にとって大きなメリットをもたらすことの証左と言えるであろう。

問6 図書館の利用にあたっての課題は、どのようなことですか。該当する記号に○をつけてください。

(複数回答可)

利用の課題

■ 小学校 n=249 ■ 中学校 n=73 □ 高等学校 n=7 □ 特別支援学校 n=8



〔小学校〕 n = 249

連携事業を実施している 262 校中、249 校 (95%) から回答を得た。「図書館まで遠く、利用不便である」が最も多く 123 校 (49%) で、以下「業務が多忙のため、連携内容の十分な検討・評価ができない」が 110 校 (44%)、「図書館職員との連絡調整等のための時間が不十分である」が 69 校 (28%)、「教職員の異動等のため、図書館の職員との継続的な連携ができない」が 24 校 (10%)、「毎年恒例になっているため、連携内容がマンネリ化している」が 15 校 (6%)、「事前・事後の指導や準備に時間を取りられる」が 14 校 (6%)、「事前打合せや連絡調整が多く手かかる割に効果が薄い」が 8 校 (3%) という順であった。また、「その他」として、「利用する資料が他校と重なり、利用できないことがある」「月曜日が休館である」「開館時間が短い」「図書館担当職員が毎年変わってしまい、連絡しづらい」「図書館に出向く時間が教育課程に設けられていない」「当日連絡で学校貸出が出来る融通性をもってほしい」「利用するための授業時間の確保・調整が出来ない」「学校司書が町立図書館の職員であるため連携は十分である」などの回答があった。

〔中学校〕 n = 73

73 校から回答を得た。中学校では、「業務が多忙のため、連携内容の十分な検討・評価ができない」が 45 校 (62%) と最も多く、以下「図書館まで遠く、利用不便である」が 27 校 (37%)、「図書館職員との連絡調整等のための時間が不十分である」が 19 校 (26%)、「事前・事後の指導や準備に時間を取りられる」が 11 校 (15%)、「教職員の異動等のため、図書館の職員との継続的な連携ができない」が 4 校 (5%)、「毎年恒例になっているため、連携内容がマンネリ化している」が 3 校 (4%)、「事前打合せや連絡調整が多く手かかる割に効果が薄い」が 2 校 (3%) という順になった。また、「その他」として、「利用の仕方についての情報が少ない」「団体貸出の冊数が少ない」「借りたい時に借りることが出来ない（制約が多い）」「継続して利用する必要性のある機会がない」「図書館まで遠いが図書事務担当者が出向くため大きな問題点はない」などの回答があった。

〔高等学校〕 n = 7

高等学校では、「業務が多忙のため、連携内容の十分な検討・評価ができない」が 4 校 (57%) で最も多く、「図書館職員との連絡調整等のための時間が不十分である」「教職員の異動等のため、図書館の職員との継続的な連携ができない」「毎年恒例になっているため、連携内容がマンネリ化している」「事前・事後の指導や準備に時間を取りられる」「図書館まで遠く、利用不便である」が各 1 校 (14%) で、「事前打合せや連絡調整が多く手かかる割に効果が薄い」という回答はなかった。「その他」も特に挙げられなかった。

〔特別支援学校〕 n = 8

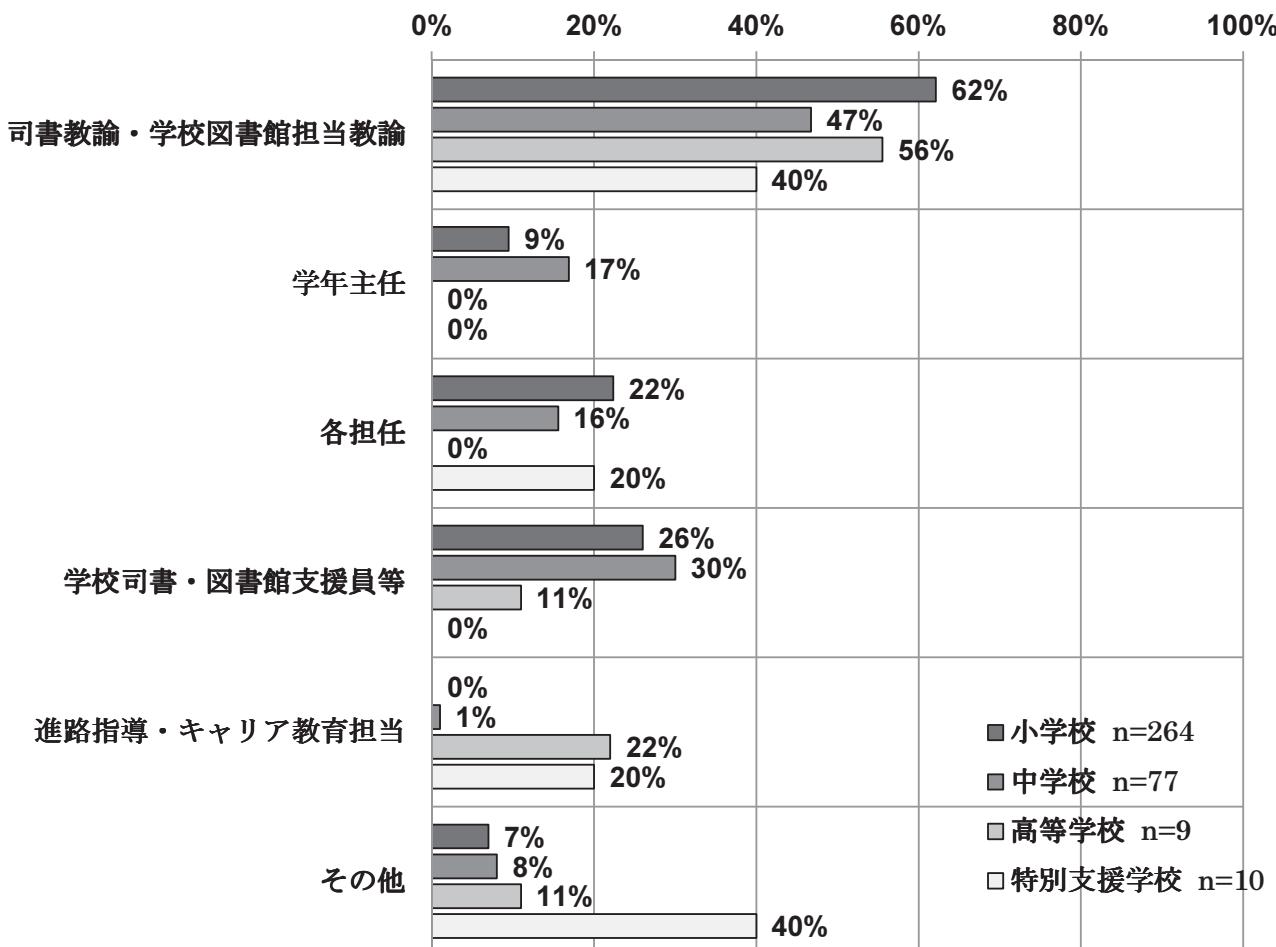
連携事業を実施している 9 校中、8 校 (89%) から回答を得た。特別支援学校では、「業務が多忙のため、連携内容の十分な検討・評価ができない」が最も多く 4 校 (50%) で、以下「図書館まで遠く、利用不便である」が 3 校 (38%)、「図書館職員との連絡調整等のための時間が不十分である」「教職員の異動等のため、図書館の職員との継続的な連携ができない」「事前・事後の指導や準備に時間を取りれる」が各 1 校 (13%) であった。「毎年恒例になっているため、連携内容がマンネリ化している」「事前打合せや連絡調整が多く手かかる割に効果が薄い」という回答はなく、「その他」も特に挙げられなかった。

全体として「業務が多忙のため、連携内容の十分な検討・評価ができない」という回答が最も多かった。しかし、「事前打合せや連絡調整が多く手かかる割に効果が薄い」という回答はごく少数であることから、連携のもたらす効果や有効性そのものについては十分に認識していることがうかがえる。

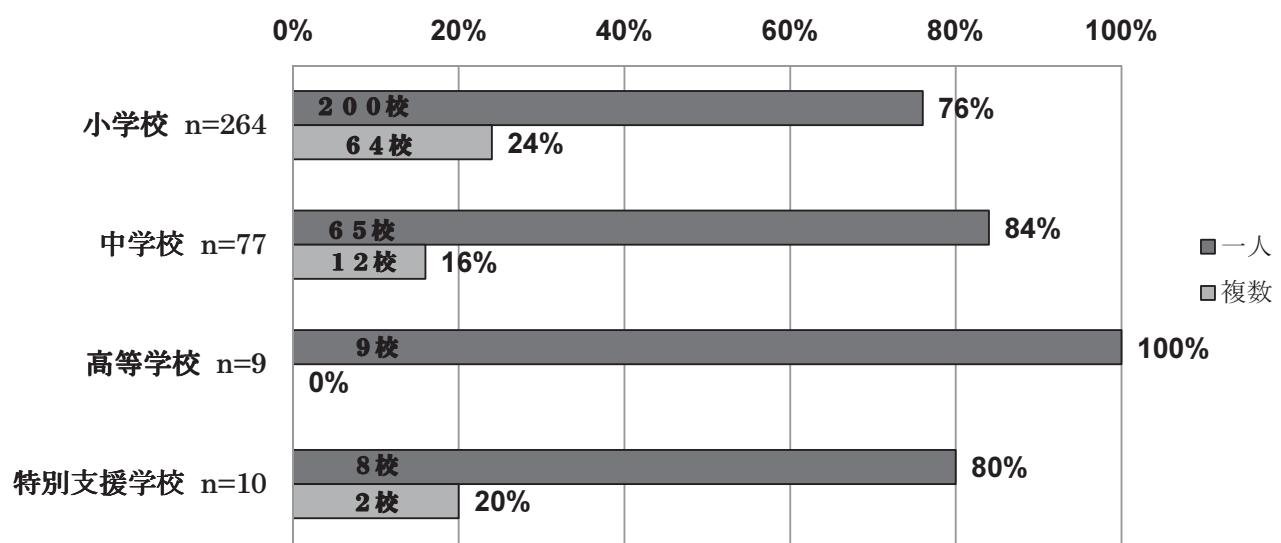
また、小・中学校においては、連携をしていない理由でも上位であったが、図書館を利用する上で距離の問題が大きいということが明らかとなった。

問7 図書館の利用にあたっての、校内の組織・体制（窓口）について、該当する記号に○をつけて下さい。
 (複数回答可)

連携の窓口

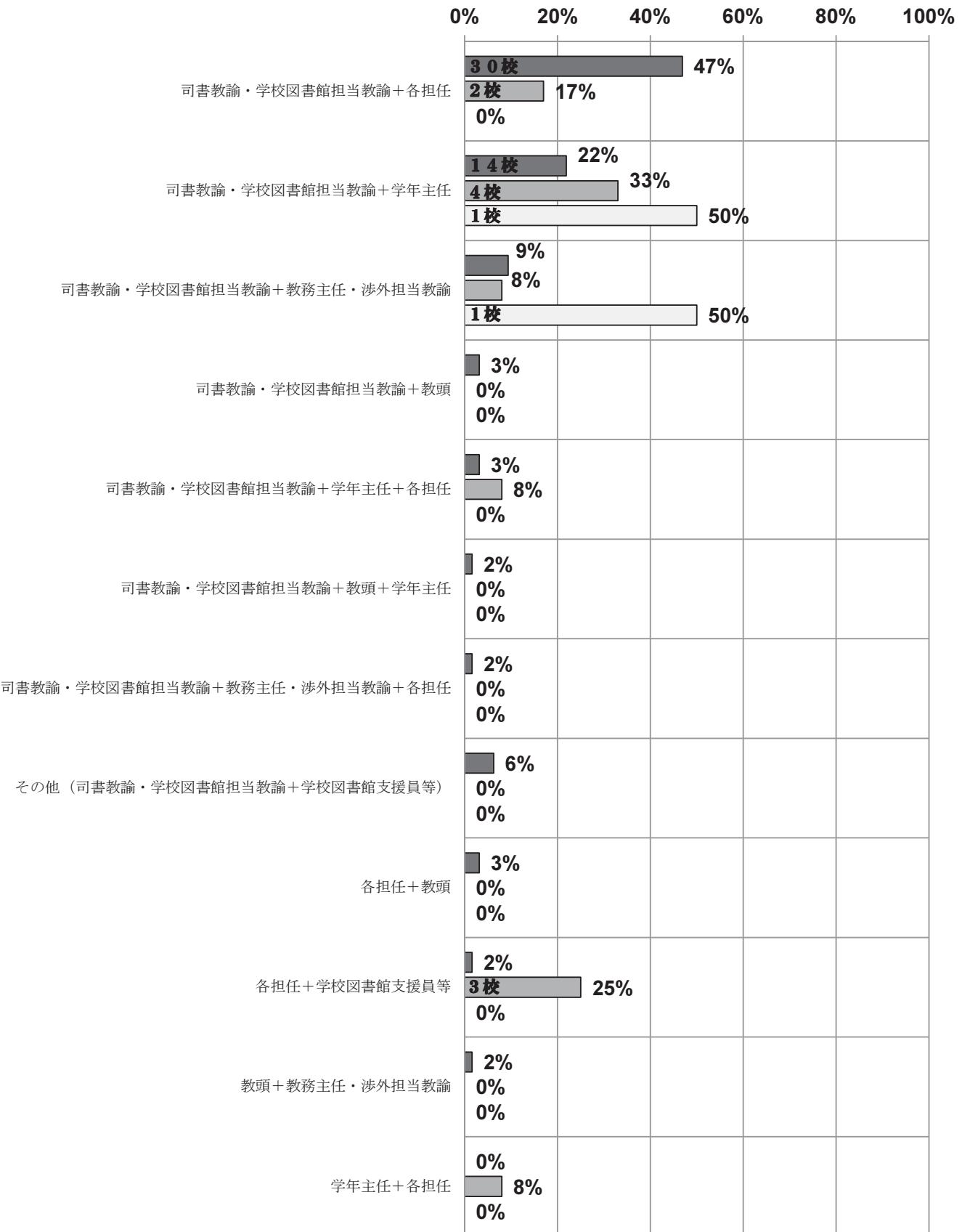


連携窓口の人数



複数担当の組合せ

■ 小学校 n=64 □ 中学校 n=12 □ 特別支援学校 n=2



〔小学校〕 n = 264

264校から回答を得た。「司書教諭・学校図書館担当教諭」が164校(62%)で最も多く、以下「学校司書・図書館支援員等」69校(26%)、「各担任」が59校(22%)、「学年主任」が25校(9%)と続いている。「その他」としては、「教務主任・涉外担当教諭」が11校(4%)、「教頭」が7校(3%)であった。「学校司書・図書館支援員等」は、宇都宮市で「学校司書」が全校に配置されているほか、「学校図書館事務」(矢板)「図書支援の職員」(那須塩原)「学校図書館支援員」(鹿沼)「図書事務員」(栃木)など、名称は異なるものの、他の市町でも学校図書館に非常勤職員として配置されるようになってきた。「学校司書・図書館支援員等」は、司書教諭の補助的業務を主に行っているが、各市町により雇用する人数や勤務日数・勤務時間等にはばらつきがある。

〔中学校〕 n = 77

中学校においては77校から回答があった。「司書教諭・学校図書館担当教諭」が36校(47%)で最も多く、以下「学校司書・図書館支援員等」が23校(30%)、「進路指導・キャリア教育担当」が17校(22%)、「学年主任」が13校(17%)「各担任」が12校(16%)と続き、「その他」として「教務主任・涉外担当教諭」「教頭」「特に決まっていない」「事務職員」「各担当(当事者)」「事務補助」が各1校(1%)となっている。中学校でも、宇都宮市で「学校司書」が全校配置されているため、「学校司書・図書館支援員等」の割合が多くなっている。また、小学校との大きな違いとして「進路指導・キャリア教育担当」が図書館との連携の窓口を務めるケースが多いことを指摘できる。

〔高等学校〕 n = 9

高等学校は9校から回答があった。「司書教諭・学校図書館担当教諭」が5校(56%)で最も多く、以下、「進路指導・キャリア教育担当」が2校(22%)、「学校司書・図書館支援員等」が1校(11%)となった。「その他」は、「特に設定していない」が1校であり、他校種で見られる「学年主任」や「各担任」といった回答は見られない。「進路指導・キャリア教育担当」が窓口になるケースについては、中学校と同様にインターンシップを中心連携事業を行っているものと考えられる。

〔特別支援学校〕 n = 10

特別支援学校からは10校から回答があった。「司書教諭・学校図書館担当教諭」が4校(40%)で最も多く、以下「進路指導・キャリア教育担当」「各担任」が各2校(20%)となっている。「その他」としては、「教務主任・涉外担当教諭」「地域交流係」「担当教員(当事者)」などが挙げられている。「進路指導・キャリア教育担当」については、中・高と同様に職場体験やインターンシップに関わる連携を中心に行っているケースとして捉えられる。

なお、窓口が複数の教員により担当されるケースは小学校で64校(24%)となっており、そのうち「司書教諭・学校図書館担当教諭+α」の組み合わせが60校(94%)とそのほとんどを占めている。内訳は「司書教諭・学校図書館担当教諭+担任」が30校(47%)と最も多く、「司書教諭・学校図書館担当教諭+学年主任」が14校(22%)、「司書教諭・学校図書館担当教諭+教務主任・涉外担当教諭」が6校(9%)、「司書教諭・学校図書館担当教諭+教頭」が2校(3%)と続いている。

また、教員は複数ではないが、「司書教諭・学校図書館担当教諭+学校図書館支援員等」の組合せで連携の窓口を担当しているのが4校(6%)となっている。学校図書館司書を全校配置している宇都宮市をはじめ、学校図書館司書等を配置している他市町も実質的にはこの組合せに近いケースとなっていると思われる。

一方で「司書教諭・学校図書館担当教諭」が窓口とならないケースも4校(6%)あり、その中には、「各担任+教頭」が2校、「各担任+学校図書館支援員等」と「教務主任・涉外担当教諭+教頭」がそれぞれ1校含まれる。以上の結果を踏まえると、最終的に小学校で「司書教諭・学校図書館担当教諭」が一人で連携の窓口を務めているのは100校(38%)ということになる。

同様に中学校のデータを見ると、複数の教員が担当しているケースは12校(16%)で、小学校よりはやや少

ない。内訳は「司書教諭・学校図書館担当教諭+学年主任」が4校(33%)、「司書教諭・学校図書館担当教諭+担任」が2校(17%)、「司書教諭・学校図書館担当教諭+教務主任・涉外担当教諭」が1校(8%)となっており、その他のケースとして「各担任+学校図書館支援員等(事務職員含む)」が3校(23%)ある。

また、三者以上が窓口になるケースでは、「司書教諭・学校図書館担当教諭+学年主任+各担任」が1校(8%)、「司書教諭・学校図書館担当教諭」が窓口とならないケースについても「学年主任+各担任」という1校(8%)が報告されている。したがって、中学校において「司書教諭・学校図書館担当教諭」が一人で窓口を行っているのは25校(31%)ということになる。

高等学校では複数の教員が窓口になるケースは報告されていない。

特別支援学校では2校(20%)が複数の教員を窓口としており、「司書教諭・学校図書館担当教諭+学年主任」と「司書教諭・学校図書館担当教諭+教務主任・涉外担当教諭」が各1校となっている。したがって「司書教諭・学校図書館担当教諭」が単独で窓口となっているのは2校(20%)となる。

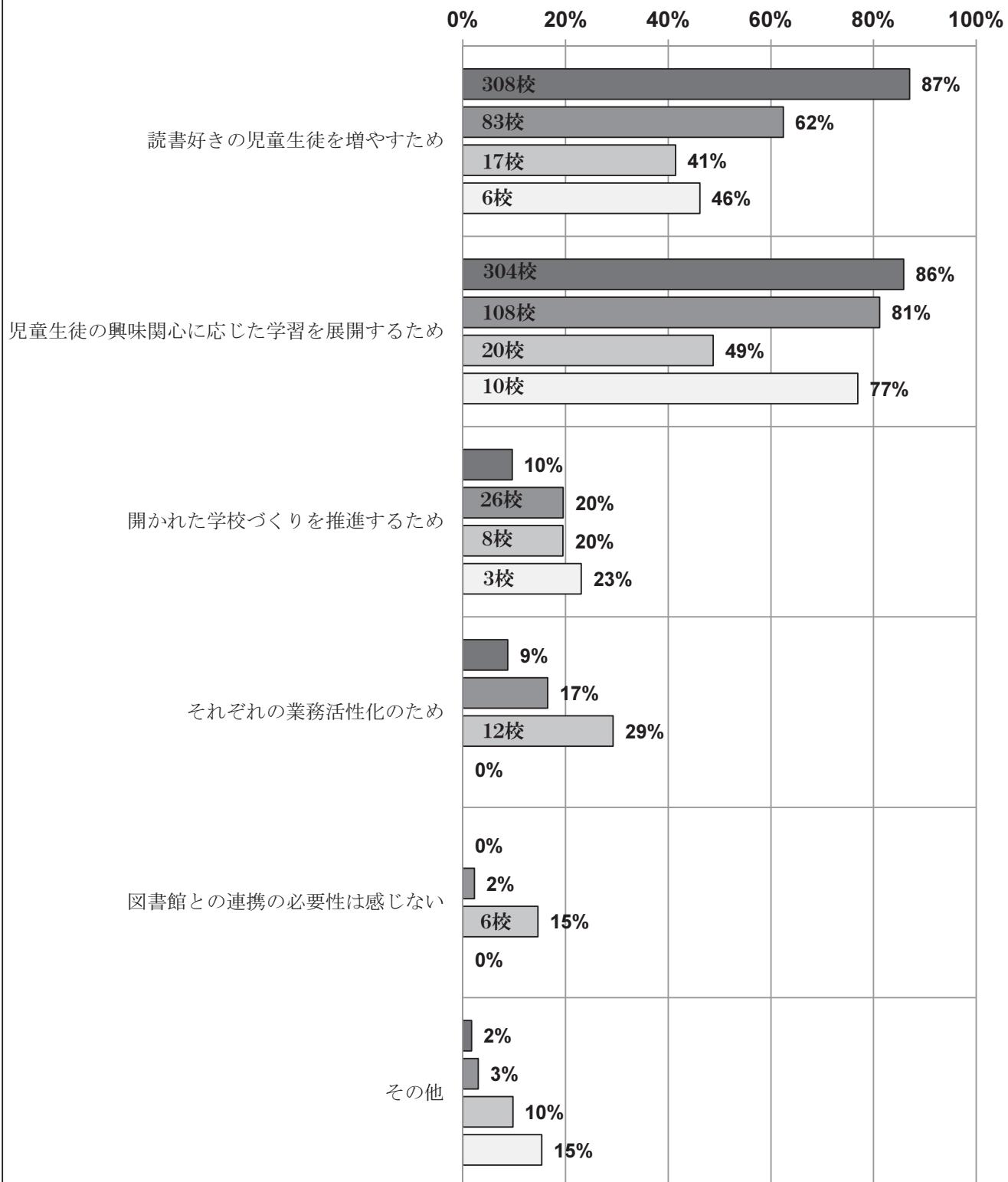
以上の結果から見ると、多くの場合、図書館との連携においては「司書教諭・学校図書館担当教諭」が担当している可能性が高く、特に司書教諭(12学級以上の学校に配置)が中心になっていると思われる。しかし、連携に係る当該学級・学年での対応に任されるケースも小・中学校では約3割程度見られる。また、中学校や高等学校など図書館との連携の中心が職場体験やインターンシップとなっている場合、当該学年の学年主任や進路指導・キャリア教育担当が窓口を担当するケースも多い。このように窓口が必ずしも「司書教諭・学校図書館担当教諭」には一本化されず、分散化している状況も見られる。

司書教諭といつても現実には加配されているわけではなく、担任と兼務がほとんどであるのが実態である。したがって、こうした司書教諭に図書館業務が集中しすぎないように工夫されていることがうかがえる。

問8 学校と図書館との連携の必要性について、該当する記号に○をつけてください。 (複数回答可)

連携の必要性

■小学校 n=354 ■中学校 n=133 □高等学校 n=41 □特別支援学校 n=13



〔小学校〕 n = 354

アンケートを回収できた 361 校中、354 校（98%）から回答を得た。「読書好きの児童生徒を増やすため」が最も多く 308 校（87%）であった。次いで「児童生徒の興味関心に応じた学習を展開するため」が 304 校（86%）、「開かれた学校づくりを推進するため」が 34 校（10%）、「それぞれの業務活性化のため」が 31 校（9%）となっている。「その他」として、「学校図書館の蔵書だけでは足りないため」「公立図書館が地域の情報発信センターとしての役割を果たし、教育活動の効果を上げるため」「図書館に関心を持たせるため」「調べ学習の効果が上がる」「生涯にわたって図書館を利用し、学べる児童を育成するため」などの回答が見られた。蔵書数や学習効果など現実的な必要性に加えて生涯学習の観点からの意見もあり、興味深い。

〔中学校〕 n = 133

アンケートを回収できた 136 校中、133 校（98%）から回答を得た。「児童生徒の興味関心に応じた学習を展開するため」が 108 校（81%）と最も多く、「読書好きの児童生徒を増やすため」が 83 校（62%）で、それに次いでいる。以下、「開かれた学校づくりを推進するため」が 26 校（20%）、「それぞれの業務活性化のため」が 22 校（17%）で、「図書館との連携の必要性は感じない」は 3 校（2%）であった。

「その他」としては、「資料を十分に確保するため」「学校だけでは学習に必要な資料を十分にそろえられないため（質・量とも）」「地域柄連携は厳しいので遠慮する」といった意見も挙げられた。中には「図書館の専門性を学校で生かすため」との回答もあり、図書館を一方的に「活用」する対象として捉えるのではなく、図書館側の視点から連携の必要性を捉えている意見も見られた。

〔高等学校〕 n = 41

アンケートを回収できた 46 校中、41 校（89%）から回答を得た。中では「児童生徒の興味関心に応じた学習を展開するため」が 20 校（49%）と最も多く、「読書好きの児童生徒を増やすため」が 17 校（41%）、「それぞれの業務活性化のため」が 12 校（29%）、「開かれた学校づくりを推進するため」が 8 校（20%）、「図書館との連携の必要性は感じない」が 6 校（15%）という順になった。

「その他」としては、「学校ではあまり使用されないが生徒が必要とするもの、高価で購入することが出来ない資料などが揃っているので利用させてもらう」「学校図書館の蔵書では対応できないリクエストやレファレンスに応えるため」「自校の予算が少ない中で多くの資料を活用するため」「お互いの図書資料の有効活用のため」などの回答があった。

〔特別支援学校〕 n = 13

アンケートを回収できた 14 校中、13 校（93%）から回答を得た。「児童生徒の興味関心に応じた学習を展開するため」が 10 校（77%）で最も多く、以下「読書好きの児童生徒を増やすため」が 6 校（46%）、「開かれた学校づくりを推進するため」が 3 校（23%）と続いた。「それぞれの業務活性化のため」「図書館との連携の必要性は感じない」という回答はなかった。「その他」としては、「職業意識の喚起」「児童生徒の発達段階に応じた学習指導を行うため」といった回答が見られた。

学校にとって、連携の必要性は、「児童生徒の興味関心に応じた学習を展開するため」が最も多くなっている。ついで「読書好きの児童生徒を増やすため」が多い。その他の項目は圧倒的に少なくなっている。このように学校にとって図書館との連携は、児童生徒の学習に関する必要性が圧倒的に多くなっている。

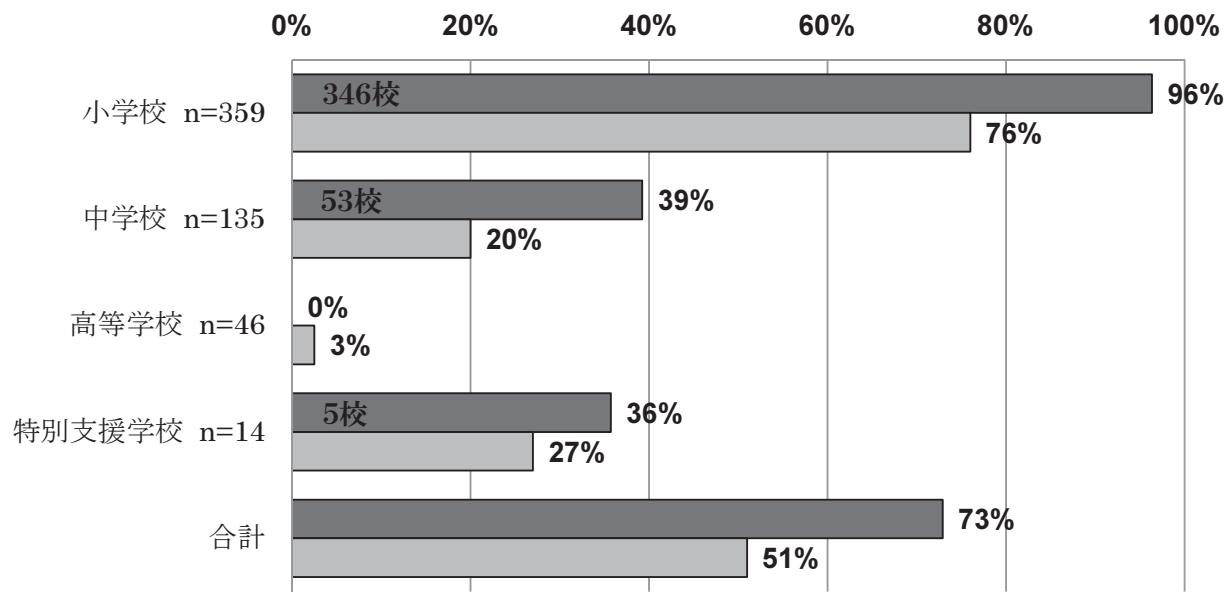
また、「読書好きの児童生徒を増やすため」という理由は小学校で特に多くなっている。これは、文科省の実施した「学校図書館の現状に関する調査」（平成 20 年）で、全校一斉読書活動をはじめとした読書活動推進のための取組が全国の小学校ではほぼ 100% 実施されていることからも、小学校では他の学校種に比べて読書活動に重点が置かれているためと考えられる。

これらの回答を見ても学校では概ね図書館との連携を肯定的に見ており、一定程度の効果も上がっていると考えていることがうかがえる。

問9 貴校では、読み聞かせや図書館（図書室）業務を行うボランティアを受け入れていますか。
 該当する記号に○をつけてください。

学校図書館ボランティアの導入率

■本県実施率 □全国平均



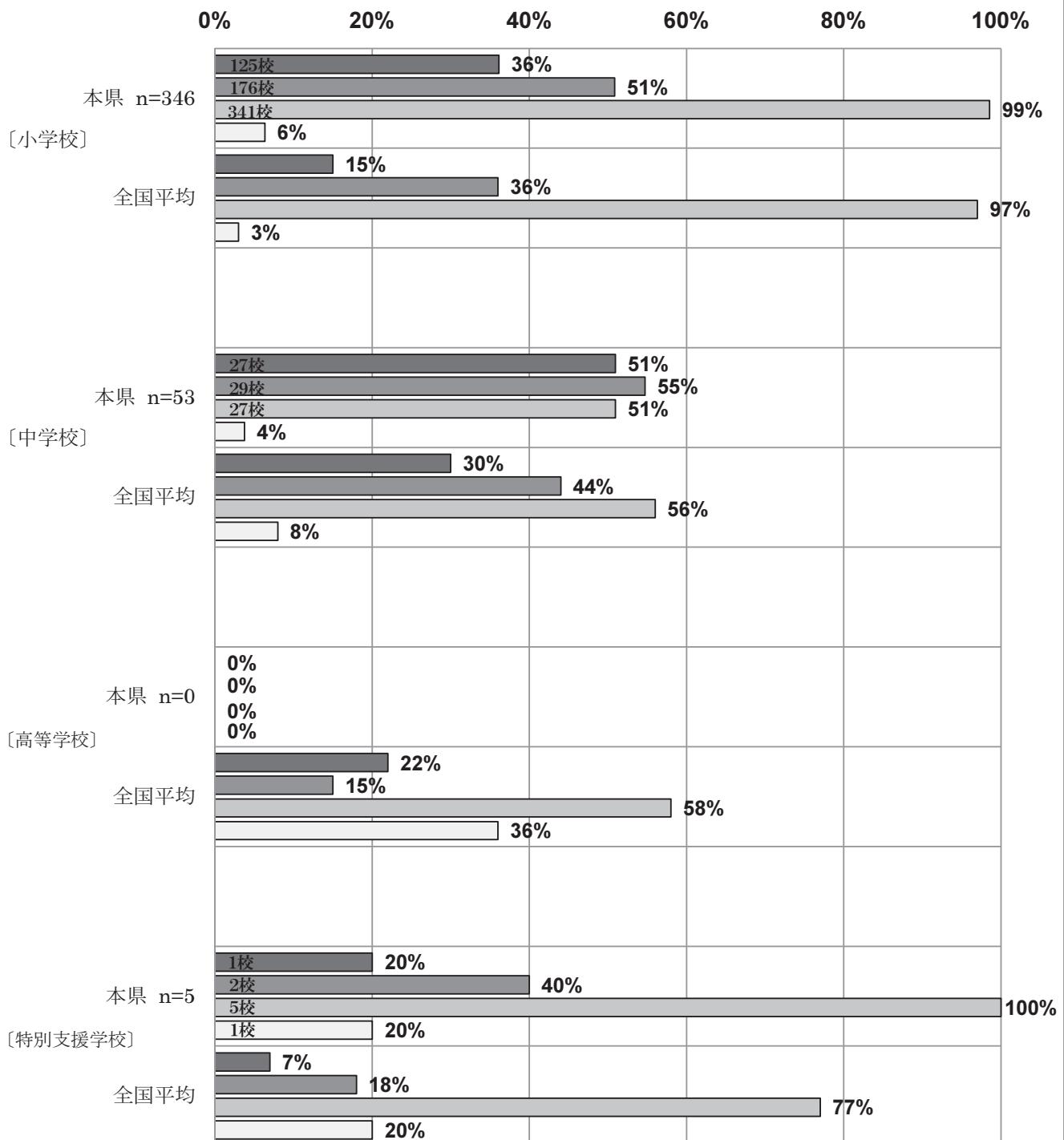
ほとんどの小学校では学校図書館ボランティアの受け入れが行われている。中学校でも約4割の学校で受け入れている。これは、全国平均値（平成20年度「学校図書館の現状に関する調査」：文部科学省）を20%程度上回っており、非常に高い割合である。特別支援学校では5校（36%）で受け入れており、全国平均をやや上回る。高等学校での受け入れは見られない。県内の高等学校では、専任の学校司書の配置や生徒の図書委員会などの活動が行われるため、ボランティアを受け入れる環境にはないと考えられる。

問10 ボランティアの方が行っていることについて、該当する記号に○をつけてください。

(複数回答可)

ボランティアの活動

- 配架や貸出・返却業務棟の図書館サービスに係る支援
- 学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援
- 読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援
- その他



ボランティアを活用している 346 校すべてから回答があった。活動内容は「児童・生徒への読み聞かせ」が 339 校 (98%) と最も多く、「図書の補修」が 143 校 (41%)、「図書の受入れ・貸出し・整理」が 124 校 (36%) 「調べ学習などの支援」が 13 校 (4%) となっている。「その他」は、「飾りつけ・掲示物作成」等の図書室の整備に関わる支援が 34 校 (10%)、「資料収集や選書」「クラブでの読み聞かせ指導」「国語の授業での範読」などが見られた。

分類の項目を文科省の調査に合わせて「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」「その他」とすると、「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」が 125 校 (36%)、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」が 176 校 (51%)、「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」が 341 校 (99%)、「その他」が 22 校 (6%) となる。これを全国平均と比較すると、「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」で 21%、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」で 15%、本県が上回る結果となった。他の項目については、ほぼ全国平均並みである。

〔中学校〕 n = 53

ボランティアを受け入れている 53 校すべてから回答があった。結果は「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」が 27 校 (51%)、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」が 29 校 (55%)、「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」が 27 校 (51%) となっている。同じく文科省調査の全国平均データと比較すると、「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」で 21%、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」で 11% 上回り、「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」が 5% 下回っている。

〔高等学校〕 n = 0

高等学校ではボランティアを受け入れている学校がないため、当然活動は行われていない。参考までに全国平均では「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」で 22%、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」で 15%、「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」が 38%、「その他」で 20% となっている。

〔特別支援学校〕 n = 5

ボランティアを受け入れている 5 校すべてから回答があった。「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」が 1 校 (20%)、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」が 2 校 (40%)、「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」が 5 校 (100%)、「その他」が 1 校 (20%) である。

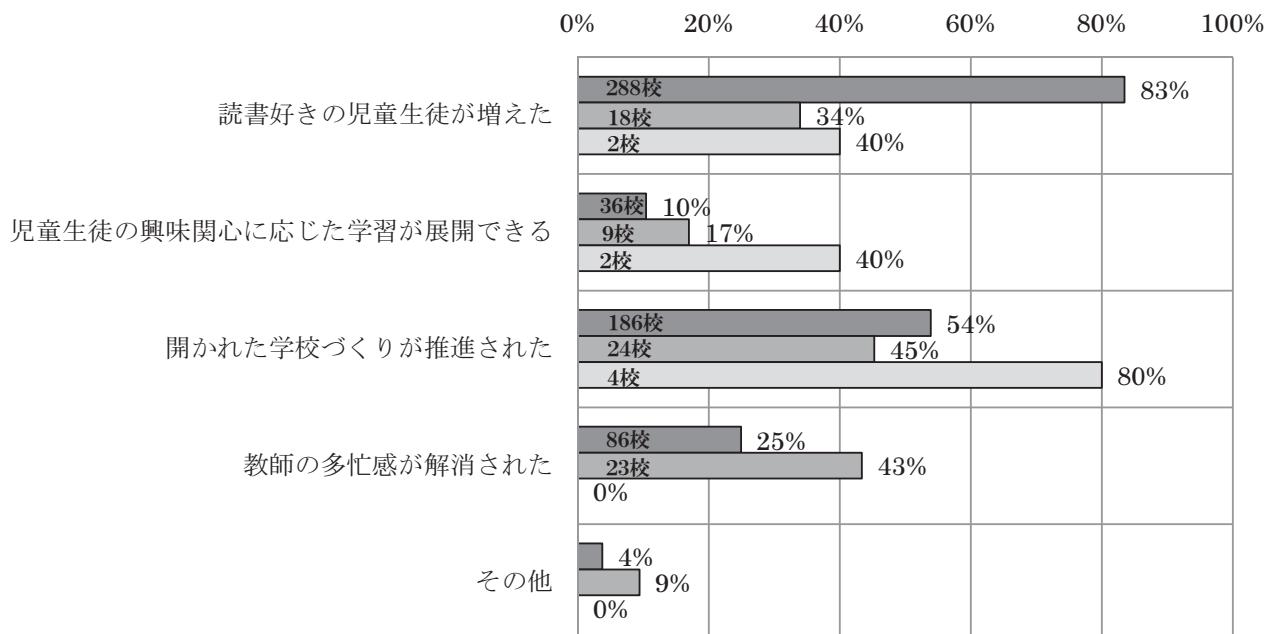
全国平均と比較すると、「配架や貸出・返却業務等の図書館サービスに係る支援」で 13%、「学校図書館の書架見出し、飾りつけ等施設の整備に係る支援」で 22%、「読み聞かせ、ブックトーク等、読書活動の支援」で 23% 上回っている。

栃木県ではボランティアを受け入れている学校の割合は全国平均から見ても高くなっている。更に全ての項目についてほぼ全国平均を上回っている。本県の特徴として、「図書館サービスに係る支援」の行われている割合が多いことは着目に値する。

問 11 ボランティアの方を受け入れていることの利点について、該当する記号に○をつけてください。
(複数回答可)

ボランティア受入の利点

■ 小学校n=345 ■ 中学校n=53 □ 特別支援学校n=5



〔小学校〕 n = 345

ボランティアを受け入れている 346 校中、345 校 (99.7%) より回答を得た。

「読書好きの児童生徒が増えた」が 288 校 (83%) と最も多く、以下「開かれた学校づくりが推進された」が 186 校 (54%)、「教師の多忙感が解消された」が 86 校 (25%)、「児童生徒の興味関心に応じた学習が展開できる」が 36 校 (10%) と続いている。

「その他」としては、「図書室の整備・充実」が 3 校、「図書の廃棄の減少」が 2 校、「読み聞かせを楽しみにする児童の増加」が 2 校、「読書の幅の広がり」が 2 校、「教師とは違った視点の選書」が 1 校、「本に親しむ場面の増加」が 1 校、「パソコン管理への移行」が 1 校から挙がっている。

〔中学校〕 n = 53

ボランティアを受け入れている 53 校すべてから回答を得た。

最も多かったのは「開かれた学校づくりが推進された」で 24 校 (45%) であった。次いで「教師の多忙感が解消された」が 23 校 (43%)、「読書好きの児童生徒が増えた」が 18 校 (34%)、「児童生徒の興味関心に応じた学習が展開できる」が 9 校 (17%) の順となっている。「その他」としては、「図書室の整備」が 3 校、「図書館司書の多忙感の解消」「教師の負担軽減」がそれぞれ 1 校から挙がっている。

〔高等学校〕 n = 0

ボランティアを受け入れている学校がないため、回答はなかった。

〔特別支援学校〕 n = 5

ボランティアを受け入れている 5 校すべてから回答を得た。

最も多かったのは、「開かれた学校づくりが推進された」で 4 校 (80%)、「読書好きの児童生徒が増えた」「児童生徒の興味関心に応じた学習が展開できる」は、ともに 2 校 (40%) であった。「教師の多忙感が解消された」「その他」の回答はなかった。

ボランティアの受入れが読書好きな児童生徒の育成につながったという回答が小学校では最も多くなっている。中学校では、生徒の読書に与える効果よりも開かれた学校づくりや教員の多忙化解消が多くなっている。同様のことは特別支援学校にも言える。このようにボランティアの受入効果は、学校種によって大きく異なっているのが特徴である。

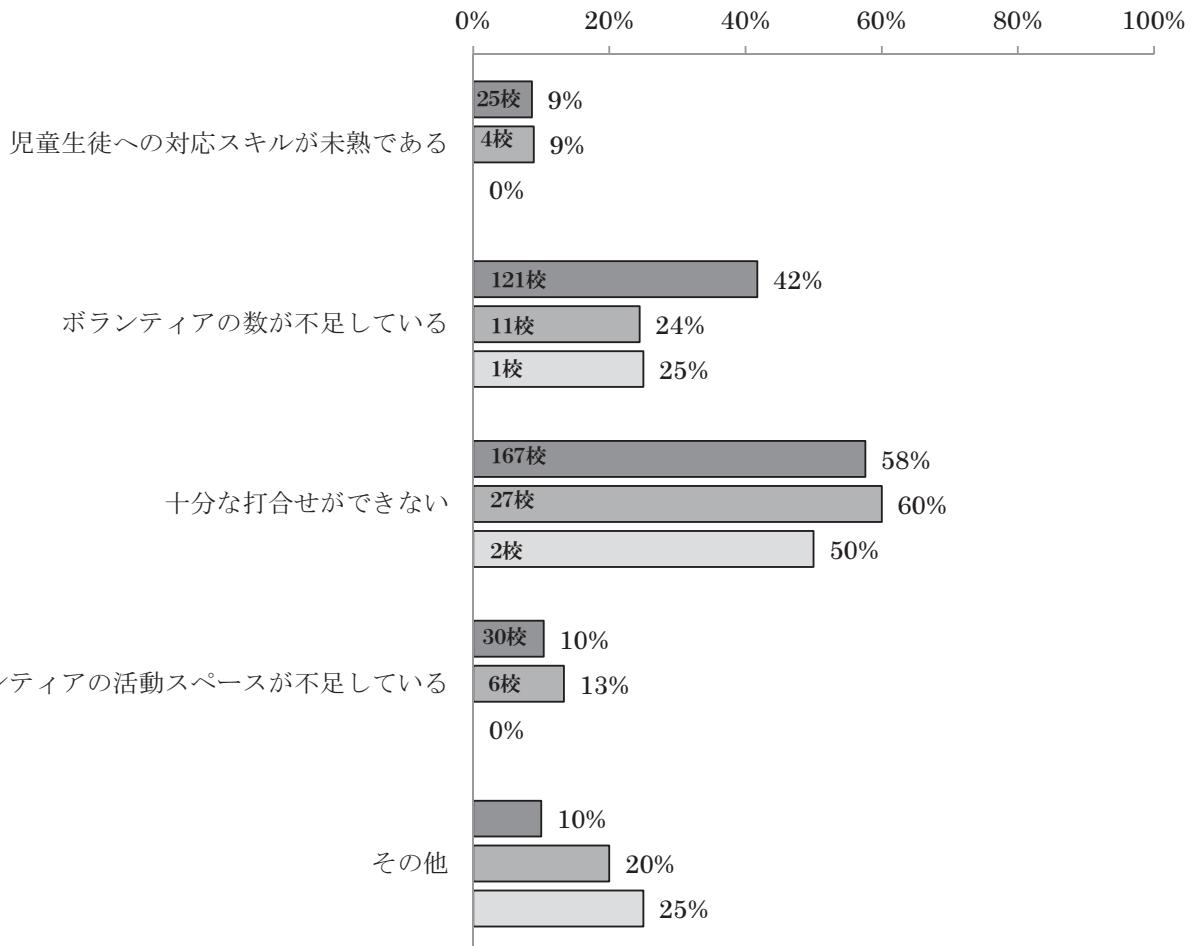
さらに、問10にみられるようにボランティアの活動内容のうち、「図書館サービス」に係る内容が中学校で51%、小学校で36%、特別支援学校で20%と、負担感が解消されたと回答のあった順と同様になっていることから、「図書館サービス」に係る支援が「教師の多忙感解消」につながる可能性が指摘できる。

一方、「開かれた学校づくりが推進された」とする回答は、中・特別支援学校で最も多く、小学校でも2番目に支持されており、学校と地域の連携推進にボランティアの果たす役割が大きいという認識の多いことを示している。

問12 ボランティアの活動を円滑に進めていく上で課題となっていることについて、該当する記号に○をつけてください。
(複数回答可)

ボランティア受入の課題

■小学校 ■中学校 □特別支援学校



[小学校] n = 290

ボランティアを受け入れている 346 校中、290 校 (84%) から回答を得た。課題として捉えていることは、「十分な打合せができない」が最も多く、167 校 (58%) である。続いて「ボランティアの数が不足している」が 121 校 (42%)、「ボランティアの活動スペースが不足している」が 30 校 (10%)、「児童生徒への対応スキルが未熟である」が 25 校 (9%) となっている。「その他」としては「ボランティアの活動時間の確保」が 4 校、「ボランティアの自主的な運営に移行できない」が 3 校、「予算がない」が 2 校、さらに「読み聞かせの選書」「お礼などが十分に出来ない」「回数を増やしたい」「システムが未熟」「守秘義務が守れない」「他校と同じ組織に依頼しているので時間調整が大変」「来てほしい時に来てもらえない」「学校側の要望と実施内容が合わない」「ボランティアの申し出に対して、学校として要望がない」「ボランティアが来るのを忘れる」「市の図書館からボランティアを派遣してほしい」などの課題が挙げられた。

[中学校] n = 45

ボランティアを受け入れている 53 校中、45 校 (85%) から回答を得た。課題として捉えていることは、「十分な打合せができない」が最も多く 27 校 (60%)、「ボランティアの数が不足している」が 11 校 (24%)、「ボランティアの活動スペースが不足している」が 6 校 (13%)、「児童生徒への対応スキルが未熟である」が 4 校 (9%) であった。この結果は、小学校とまったく同じ傾向を示している。「その他」としては「特に課題はない」が 5 校あり、「活動が固定化される・新しい企画が生まれない」が 4 校、「学校側の要望や生徒の興味と実施内容が合わない」が 2 校、「継続的な活動の展開」「来校が少ない」「ボランティアに対応する時間がない」などの課題が挙げられている。

[高等学校] n = 0

ボランティアを受け入れている学校がないため、回答はなかった。

[特別支援学校] n = 4

ボランティアを受け入れている 5 校中、4 校 (80%) から回答があった。「十分な打合せができない」が 2 校 (50%)、「ボランティアの数が不足している」が 1 校 (25%) で、「特ない」との回答が 1 校 (25%) である。また、「児童生徒への対応スキルが未熟である」「ボランティアの活動スペースが不足している」という回答はなかった。「その他」としては、「将来的な人員の確保」「日時等について柔軟な対応が出来ない」といった課題が挙げられた。

全ての学校で同様の傾向を示している。最も大きな課題は「十分な打合せができない」ことであり、その原因には教員の多忙な状況による時間不足が挙げられる。そのことが、学校側の要望と実施内容が合わない状況に影響を与えていているとも考えられる。

また、「ボランティアの数が不足している」との回答も多くなっており、学校からの需要を満たすだけの人員が確保されていない現状が見える。

問13 図書館を利用しての感想や要望等を自由に御記入ください。

自由記述を学校種毎に整理して記載する。

〔小学校〕

① 図書館側の提供してくれるサービスに感謝するもの

「豊富な資料を活用できてありがたい」「巡回システム・配送サービスを利用できてありがたい」「リサイクル事業があるがいい」など

② 図書館職員の対応に感謝するもの

「見学で丁寧に応対してもらった」「要望にすぐ対応してくれる」「学校に好意的でありがたい」「必要な資料をすぐに準備してもらえる」など

③ 連携の効果

「学習効果が上がっている」「授業内容が充実した」「読書への関心が高まった・読書量が増えた」「引き続き活用していきたい」「今後活用を図っていきたい」など

④ 要望

「出前講座や出前読み聞かせ・ブックトークをしてほしい」「公立図書館と学校とのオンライン化・ネットワーク化」「巡回図書（図書の配達）を実施してほしい」「貸出期間を長くしてほしい」「学校教育を視野に入れた選書をしてほしい・購入して欲しい本のアンケートを探ってほしい」「管理システムを稼働させるなら学校司書の配置などのサポートが必要」「貸出冊数を増やしてほしい」「情報交換の場がほしい」「利用したいと思える魅力的な図書館になってほしい」「来校回数を増やしてほしい」「事前の予約なしでも団体貸出に対応してほしい」「ボランティアとの連絡調整をスピーディーにしてほしい」「資料を増やしてほしい」「長期休業中に児童向け体験事業を実施してほしい」「選書の参考資料を提供してほしい」「メールマガジンを配信してほしい」「手軽に団体貸出を受けられるシステムにしてほしい」「研修の機会がほしい」「授業に使える素材を紹介してほしい」「図書館側から連携を持ちかけてほしい」「連携の具体的なプランを提示してほしい」

⑤ その他

「選書や配架など司書からのアドバイスが参考になった」「ブックトーク研修会が参考になった」「小・中教員対象の研修会が開かれた、今後に期待している」「施設が整っており、他市町に比べて恵まれていると感じる」「インターネットの普及で調べ学習での図書利用は減っている」「図書館まで遠い上、交通手段がないため利用できないのが残念」「単元設置の関係で他校と利用が重なってしまう」「多忙感の中で、連携したくてもできないのが現状である」

〔中学校〕

① 図書館側の提供してくれるサービスや対応に感謝するもの

「図書館が連携に協力的である」「巡回図書・団体貸出・レファレンスがありがたい」「図書館だよりが参考になる」など

② 連携の効果

「ブックトークが効果的だった」「連携の機会を増やしていきたい」「連携の方法が明らかになれば（状況が整えば・機会を見て）活用していきたい」など

③ 要望

「連携事業の提案・情報提供をしてほしい」「貸出期間を長くしてほしい」「ネットワークの構築・配送サービスを実施してほしい」「研修会・情報交換会を開催してほしい」「団体貸出を実施してほしい」「巡回図書を実施してほしい」「新着図書・蔵書案内を出してほしい」「来校し、配架等の指導をしてほしい」「同一市内の図書館なのにボランティアの組織に差があるので、一律にしてほしい」など

④ その他

「インターネットの普及によって図書資料の価値が低下している」「図書館のスペース不足で利用しにくい」「生徒指導上の問題で利用しにくい」「なかなか活用できない状況」「つながりが少なく残念な状況にある」「図書館業務補助員がいろいろな仕事をこなしてくれている」「常勤の学校司書がほしい」「司書教諭の授業時数軽減をしてほしい」「まずは公立図書館をつくってほしい」「連携のあり方について提言してほしい」「国語科以外での連携事例を紹介してほしい」など

〔高等学校〕 n = 14

① 図書館側の提供してくれるサービスや対応に感謝するもの

「大変助かっている」「視聴覚教材が充実している」など

② 連携の効果

「連携可能なポイントを明らかにして連携していきたい」「連携できるような工夫を考えていきたい」など

③ 要望

「利用方法の簡便化・スムーズ化を図ってほしい」「視聴覚教材の貸出をしてほしい」など

④ その他

「学校図書館の業務に精一杯で連携事業を行う余裕がない」「連携はよいことだと思うが、実施は難しい」「連携をとる場合に、どのような手順を踏むのかがわからない」「生徒たちは公立図書館を自習スペースとして活用している」など

〔特別支援学校〕 n = 6

① 連携の効果

「図書館内の表示やディスプレイの方法は参考になるので、本校でも取り入れていきたい」「今後、連携を図る手立てを検討していきたい」など

② 要望

「図書館で廃棄する紙芝居や大型絵本などをリサイクルできるとうれしい」「もう少し広々としたスペースで閲覧できるとよい」など

③ その他

「知的障害を持つ子どもたちへの本の啓発について困難を感じている」「常勤の学校司書がほしい」など

全体を見渡してみると、やはり連携が行われている割合が高い小・中学校では図書館側の提供するサービスや職員の対応について感謝する内容が多く見られる。また、さらに連携を深めていく上での具体的な要望も出されている。中には、図書館が対応するのに困難と思える期待や要望も見られるが、学校側が率直に何を求めているのかを把握するためのヒントになると考えられる。